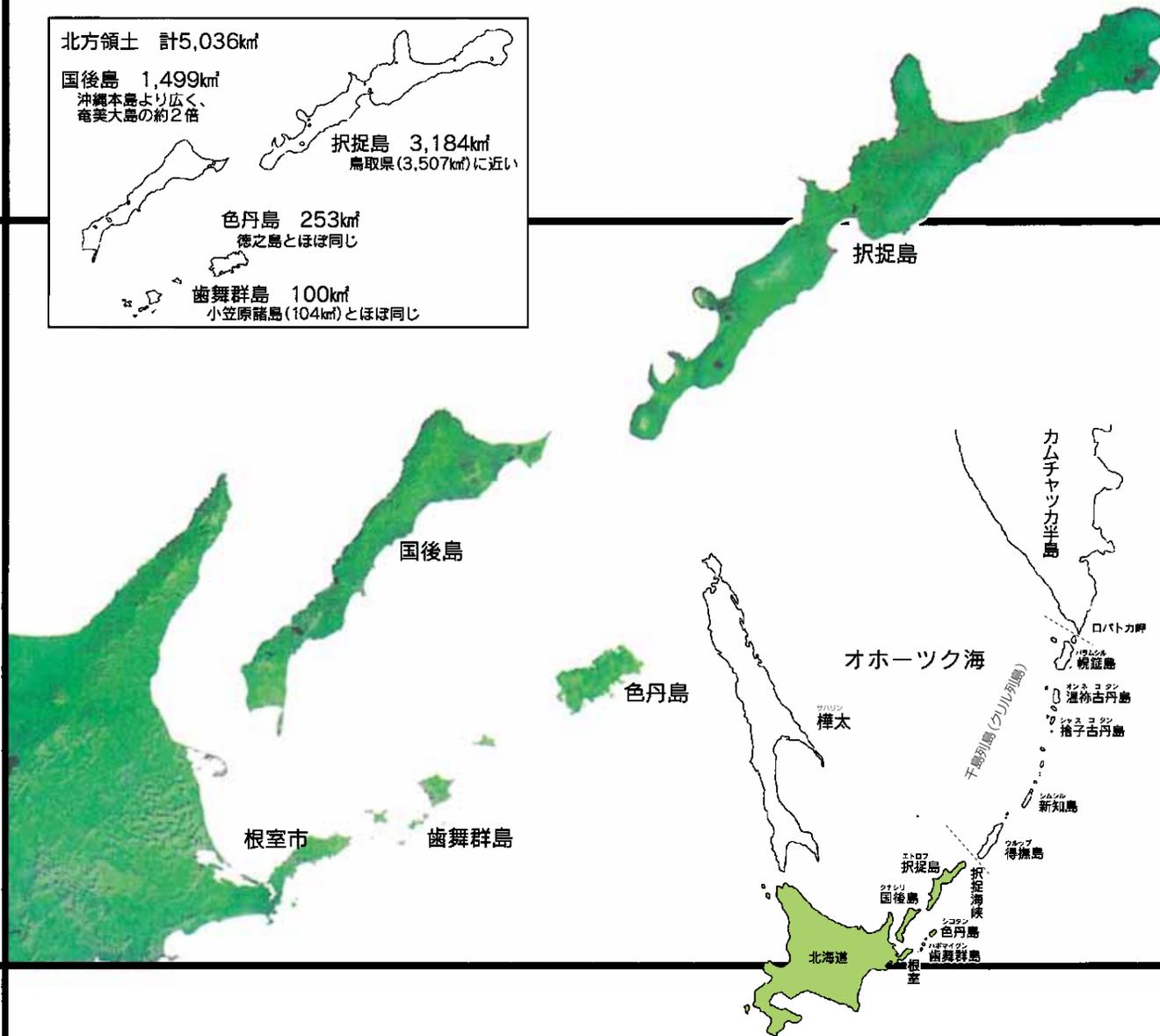
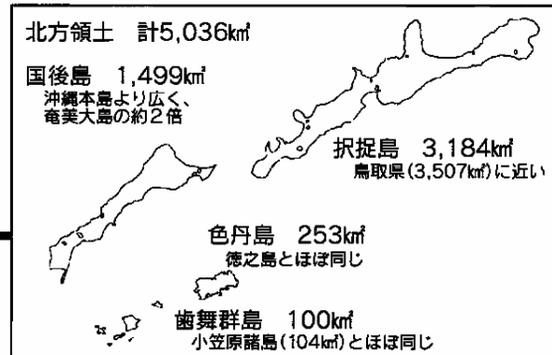


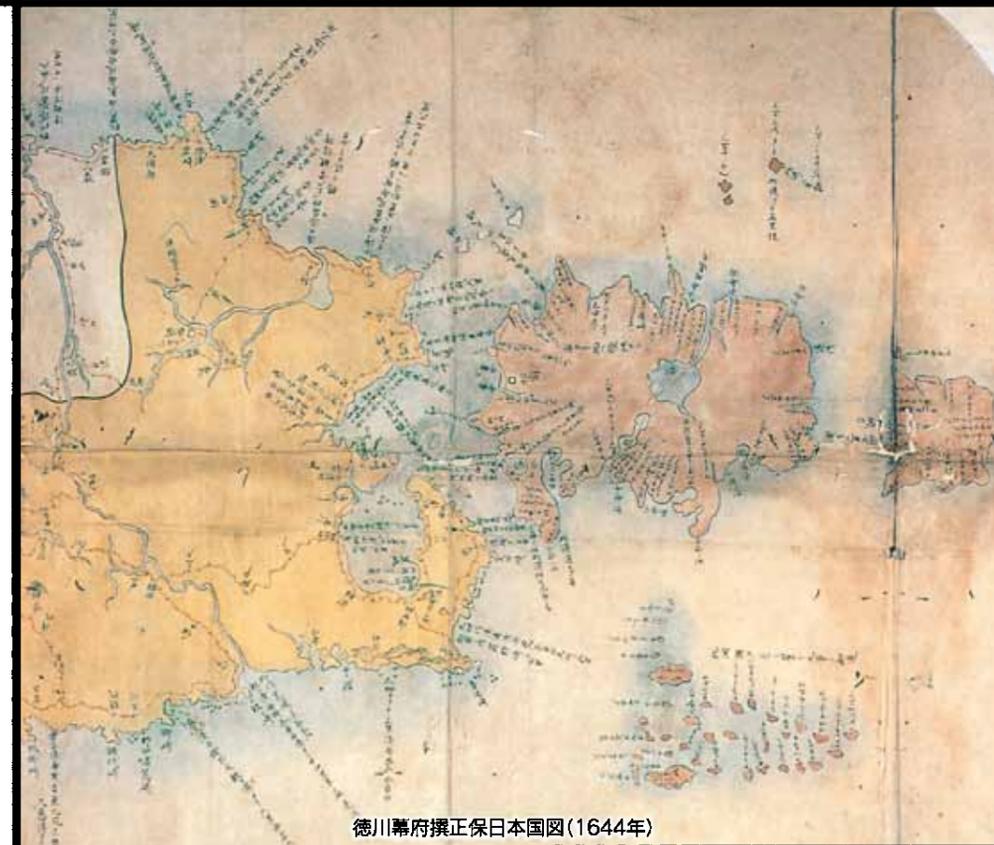
# 北方領土の早期返還を求めて

第25回「元島民の北方領土を語る会」集録

私たちが「北方領土」と呼ぶのは、  
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多楽島、志発島、  
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



『四島(しま)返還 ひとりの力が 大きな力に』

(平成26年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)

主 催 / 公益社団法人 北方領土復帰期成同盟

# も く じ

|   |                                    |              |
|---|------------------------------------|--------------|
| 1 | 平成26年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱           | 2            |
| 2 | 平成26年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況           | 3            |
| 3 | 「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて |              |
|   | ○ 北方領土返還要求運動について                   | 北方領土復帰期成同盟 4 |
|   | 【千葉県会場】                            | 6            |
|   | ○ 水晶島元島民                           | 吉田義久         |
|   | ○ 国後島元島民二世                         | 堀江則男         |
|   | 【鳥取県会場】                            | 19           |
|   | ○ 択捉島元島民                           | 武田勝三         |
|   | ○ 国後島元島民二世                         | 館下雅志         |
|   | 【秋田県会場】                            | 27           |
|   | ○ 択捉島元島民                           | 櫻井和子         |
|   | ○ 志発島元島民二世                         | 神林美砂         |
|   | 【岡山県会場】                            | 36           |
|   | ○ 志発島元島民                           | 児玉泰子         |
|   | ○ 国後島元島民二世                         | 金田慎吾         |

# 1 平成26年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

## 1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

1956年、日ソ共同宣言が署名され、両国間に国交が再開されてから既に70年近く経過した。この間、我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、未だ不法に占拠された状態が続いている。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

## 2 主 催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

## 3 後 援

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

## 4 開催時期

平成26年9月～平成26年11月

## 5 開催内容

### (1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟 (10分)

### (2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世 (20分)

北方領土元島民 (40分)

## 2 平成26年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

| 開催月日／開催都市<br>開催団体                     | 参加者<br>(人) | 語り手<br>出身島     | プロフィール  |
|---------------------------------------|------------|----------------|---|
| 9月3日(水)<br>千葉県千葉市<br>千葉県連合婦人会         | 50         | 吉田 義久<br>水晶島   | 職 業 行政書士、建築設計士<br>昭和12年8月 水晶島生まれ<br>昭和20年8月 終戦により本土へ引揚げ<br>昭和60年4月 千島歯舞諸島居住者連盟富山支部長に就任<br>昭和60年5月 千島歯舞諸島居住者連盟理事に就任<br>昭和60年6月 北方領土問題対策協会評議委員に就任             |
|                                       |            | 堀江 則男<br>国後島二世 | 職 業 会社役員<br>昭和29年 釧路市生まれ<br>昭和49年 日本製紙釧路工場入社<br>平成22年 関連会社へ転籍   |
| 10月5日(日)<br>鳥取県倉吉市<br>鳥取県連合婦人会        | 200        | 武田 勝三<br>択捉島   | 職 業 自営業<br>昭和18年 択捉島入里節出身<br>平成12年～平成21年 千島歯舞諸島居住者連盟理事<br>平成17年 千島歯舞諸島居住者連盟援護問題等専門委員<br>平成23年 千島歯舞諸島居住者連盟援護問題等専門委員会副委員長                                     |
|                                       |            | 館下 雅志<br>国後島二世 | 職 業 自営業<br>昭和34年 中標津町生まれ<br>平成13年 千島歯舞諸島居住者連盟中標津支部理事及び青年部長<br>平成24年 (公社)千島歯舞諸島居住者連盟後継者活動委員会委員長  |
| 11月7日(金)<br>秋田県大仙市<br>秋田県大仙市地域婦人連絡協議会 | 150        | 櫻井 和子<br>択捉島   | 昭和6年9月 択捉島留別村生まれ<br>昭和17年 函館に移住<br>昭和22年 家族が強制送還<br>平成13年 千島歯舞諸島居住者連盟功労賞受賞<br>平成24年 内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方担当)表彰受賞   |
|                                       |            | 神林 美砂<br>志発島二世 | 職 業 会社役員<br>昭和36年 根室市生まれ<br>昭和61年 東京たばこサービス(株)入社<br>平成11年 (有)ジンアドバタイジング設立   |
| 11月27日(木)<br>岡山県岡山市<br>岡山県婦人協議会       | 300        | 児玉 泰子<br>志発島   | 職 業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長<br>昭和19年10月 志発島生まれ<br>昭和22年秋 強制送還<br>昭和52年 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長に就任<br>平成8年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞<br>平成21年 現(公社)千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長 |
|                                       |            | 金田 慎吾<br>国後島二世 | 職 業 税理士<br>昭和36年 札幌市生まれ<br>昭和59年 金田税理士事務所入所<br>平成11年 金田慎吾税理士事務所開設   |

### 3 「元島民の北方領土を語る会」

#### 元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

## 北方領土返還要求運動について

### 北方領土復帰期成同盟

北方四島は、父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない**我が国固有の領土**です。

その、北方四島が旧ソ連、現在のロシアの不法占拠の下におかれてから、今年で69年となりました。

北方領土問題は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が日ソ中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方四島を不法に占領したことが始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領については容認したものの、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、昭和20年12月1日、当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことが出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、北方領土返還要求運動の始まりです。

根室から始まった返還要求運動は、札幌、函館と裾野を拡げ、北海道全域に拡大して行きました。その後、昭和30年代に入ってから、全国的な運動として根付いたのです。

現在は各都道府県に、北方領土返還要求運動を推進する組織として、県民会議が設置されており、様々な運動を展開しております。

昨年4月、安倍総理がロシアに公式訪問して以降、これまで5度の日露首脳会談が重ねられてきており、平和条約の締結に向け期待をしていたところですが、昨今のウクライナ情勢もあり、日露関係が後退し、北方領土問題の解決が取り残されるのではないかと危惧しています。

しかし、領土問題は国家の主権に関わる基本的な問題です。

日本政府は「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、外交交渉を続けてきております。

北方領土が返還されるためにも、今後、外交交渉が進められる中で、プーチン大統領が日本へ来日され、今度こそ北方領土問題の解決に向けての第一歩が印されることを切に願っています。

北方同盟では、関係機関、団体との連携のもと、積極的に返還要求運動に取り組み、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしておりますが、北方領土が不法占拠されて69年と長い時間が過ぎ、返還要求運動の先頭に立ってきた運動関係者は高齢化しており、次代の返還要求運動を引き継ぐ後継者の育成が急務となっています。

北方同盟では後継者の育成事業を推進するとともに、返還要求運動を粘り強く取り組み、北方領土問題を風化させぬよう取り組んで参ります。

最後に、皆さんにお願いがあります。北方領土問題は日本国民皆さんの問題です。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところであり、住むべき所なのです。そのことを忘れないで下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなり、1日も早い故郷への帰郷を願っている元島民の方々の励みとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

## 【千葉県会場】

- 開催日時 平成26年9月3日(水)
- 開催場所 千葉県千葉市
- 開催団体 千葉県連合婦人会
- 参加者 50名

### 元島民の訴え



水晶島元島民 吉田義久さん

皆さん、お早うございます。今日は、千葉県連合婦人会のリーダー研修会に沢山の人がお見えになっておられて喜ばしい事だと思っております。私は今、紹介頂きました北方領土元島民として、こういう風に各県、あるいは地元で語り部をしております。語り部をしていますけれども、私は元々無学歴な者ですから、非常に言葉遣い、あるいは言葉について不得意でございます。ですから、皆さん方にも聞きづらい点多々あるかと思っておりますけれども、その辺りは一つご容赦して頂きまして、私の体験記を聞いて頂きたいと思っております。

それで、今話そうとしている矢先に山崎同盟さんから私の言わんとする事を幾つも言われてしまって、私はさてどうしようかと、今悩んでいる所でございます。先程言われた、私もここに千葉県と北方領土の面積について、先ず第一にこうしてメモをして来たのですよ。そうしたらそれが第一に広報されましたので、私、ちょっと詳しく調べた所で、話はダブルかと思っておりますけれども、北方領土はですね、5,036平方キロメートルなんです。

それで私が調べた所では、千葉県は4,996平方キロメートル、ほぼ、ほぼ同じ位の面積だと言う事を、先ず初めに皆さんと親しくなる為にこれを先に言おうと思っていた矢先に、山崎さんから先に言われて、ありゃ弱ったなと思っております。

それと先程、北方領土からの引揚者、関係のある人は千葉県では100名余りと言っておられます。これも私もちょっとグラフを見て調べて来たら、それも先に言われちゃった、じゃあ私は何を言おうかなと、先程からちょっと苦慮しています。

ですけれども、こうして皆さん方のお顔を拝見しながらこれから喋れる事を非常に嬉しく思っております。拙いお話ですけども、一つ宜しくお付き合いして頂きたいと、こう思っております。

私自身が北方領土の問題に関わったのは、今から40年程前からですね。今皆さんが先程言われたように、ここに地図がありますけれども、これは4島があつて全体を北方領土といいますよね。北方領土には歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島と、大局的には4つにな

りますけれども、齒舞群島と言うのは群島になっておりまして、ここは5つの島から成り立った群島でございます。私の父が元々、父と言うか、先祖が北方領土に行って生活をしています。

一番前の一番小さい「水晶島」と言う島で、私は昭和12年8月10日に生まれました。そして昭和20年8月22日にこの島から根室に引き揚げた訳です。ですから当時の話については、私も8歳ですから詳しい話は良く知りません。特に経済的な事は良く分かりませんが、その当時そこで遊んでいた事、あるいはその生活の形態、実態と言うのは両親から聞いて少しずつ、うろ覚えに覚えておる訳でございます。それとやはり、私にすればそこは一つの自分の生まれた所ですから、関心を持って色々物を読んだり聞いたりした事によって、当時の島の体験、あるいは島の生活、島の産業と言うものを少しずつ覚えていった訳でございます。

それで私は今から3、4年前にですね、自由訪問と言いまして自分の生まれた所を訪ねると言うのに参加させて頂きました。島に初めて行ったのは今から11年前ですかね、やはり、自分の生まれて育った島と言うものに対して改めて、訪問した際に何と言うのですかね、感無量と言う気持ちになりました。

そこには私達、子供もいれば、当時のお父さん、お母さん方も沢山同じ島の人ですから、その島を見るのも大事ですけど、周りの人から話を聞くと、先輩から聞くと、事は非常にやはり私達の知らない話をしてくれました。そう言うような事を、そのお話もして行きたいと思います。

皆さん方もご存知の通り、北方領土と言うのは大きな4つの島から成っている島ですけども、日本固有の領土だと言う事を、皆さんも存じておられると思います。

これはどう言う事かと言うと、1700年代にですね、日本の近藤重蔵、高田屋嘉兵衛と言う先駆者がこの島を初めて調査をして、そこ

で漁業の漁場を造ったのがこの人方、先人と言うのですかね、開拓者なのですよ。それが1700年代、それから正式に国際的に認められたのは1855年の日口通行条約と言う、皆さんの資料の中にもあると思いますけれども、日本とロシアとが円満に話し合いの中で、下田と言う所で調印されたのが日本とロシアとの一番最初の国際条約でございます。それについてはあくまで日本とロシアの境界は、択捉島とウルップ島と、ウルップ島と言うのはこの群、ここにある大きな島この間を境界として国際的に決められた。これが日本とロシアとの国際問題の始まりとなります。

私達とすれば、あくまでこの北方領土、4島と言うのは日本の固有の領土だと言う事が言えるのではないかと、思う訳でございます。

私もこの北方領土返還に関わった際ですね、一番疑問に思ったのはその辺りなんで、固有なら固有、自分が捕ったから固有の領土かと言う事にちょっと疑問を持って、そして何でだろうと聞いたり調べてみたりした。その結果、平和的に国境を解決をしたと言うのが、この北方領土の主権に関わる問題だと私は理解しております。

そういう風な中で日本固有の領土ですから、1855年から徐々に人が住んで行って、そして開拓をして行った訳です。初めは大きな択捉島、国後島に日本人が生活していた訳なんですけど、それまではここにアイヌ人が住んでいたそうです。これは千島アイヌといいまして、アイヌ人にもアイヌの人種にも幾つかの種族がありまして、その中で千島列島から下がって来た千島アイヌ、この人方がここに点々と生活をして、そこでラッコとか海獣の皮ですね、そう言うものを作って松前藩に納めた。そして松前藩から日本の色々な嗜好品とか生活用品を遺贈した。そう言う風に交易したのが、この北海道の根室地方から釧路辺りの住民との交流があったと言われております。長年の間、200年以上前からそう言う風に日本人とアイヌ人との繋がりがあった訳

です。

そこに開発費を、その時本当に少ない人間ですから、そこへ日本の高田屋嘉兵衛とか近藤重蔵とか、そう言う先輩の方々が開発をして、そしてこの漁場を開拓して行ったと言うのが歴史の始まりと、こう言う風に思っております。

私は富山県なのですよ、私の親と言うのは。それは皆さん方も不思議だなと思われると思います、富山県と北方領土の関わり。これは話せばちょっと長くなりますけれども、富山県と言うのは皆さん方もご存知の通り、千葉県のはぼ真上が富山県なのでよ。その富山県からヤン衆、昔の言葉で言えば漁業者の従事者をヤン衆と言います。この人方がずうっとこの北海道の周辺の漁業に携わって来ている。そう言うような事で私も色々と年に2、3回県外に出て話しますけれども、良く質問されるのは、その話なのです。富山県と言う日本の中央なのに、なぜ北海道の北の端に行かなければいけなかったか。これは皆さん方良く体験されると思うのですけれども、やはり戦前、戦中、戦後、日本は皆生活に非常に困った時期が多々あった訳です。

特に富山県と言うのは、千葉県と違って昔から裏日本と、こう言う風に言っていましたよね。これはどう言う事かと言うと、北アルプスに遮られて、この表と裏と言うような言い方をされております。ご存知の通りこの辺り、今日参加されておられる方には県外の方もおられると思いますけれども、表日本は一年中ほとんど雪が少なく、働ける環境の所が千葉県とか茨城県。だけれど富山県と言うのは12月になると雪が降るのです。今は少し少なくなりましたが、昔は正に子供の時は12月、1月、2月、3月まで雪の中なのです。やっと働けるのは4・5・6・7・8・9・10・11月と8ヶ月しかない訳ですね。そう言う自然的な厳しさの中に、私達の親の漁師となると、富山湾と言うのは皆さんも知っている小さな湾です。東京湾のような大きな

湾ではありませんが、小さな湾ですけれども、湾の形、自然の形は、東京湾は海底、海の深さは大体300から500メートルが一番深い所だと思いますけれども、富山湾は堆になっているのです。だから1,000メートル以上あるのです。ですから漁業の事をちょっと話をしますとですね、深いから大きな漁業は出来ない訳です。1本釣りと言って、小さな針で一匹、一匹、魚を獲らなきゃならない、そう言うような漁業ですから大きい漁業では無い訳です。

ですから、海の近くの、海岸近くの漁業者は明治、昔からでしょうね、困窮する訳です。生活が非常に厳しい生活、困窮してそれこそ餓死する人もあったそうです、昔は。それで秋になると近在に落穂を拾いに出たものですよ、漁師の人はね。そう言う風な環境の厳しい中で私達は育って来た訳です。

皆さん、今現在皆さん方、お子さん、兄弟は二人か三人がほとんどだろうと、どうでしょう、私は七人兄弟なんです。当時そう言う厳しい生活環境で七人兄弟って、それはとてもじゃないが飯を食わせて行くには大変だったと思うのです。それは私達の親が一番良く知っている事でね、だから私はいつもそう言う風に思っています。今現在、考えてみると、非常に厳しい生活をしたもんだなと思っておりますね。

そう言う中でやはり餓死をする、働かなきゃ餓死する、働くどころか働く場所も無い訳です。北海道は昔蝦夷地と言ひ、北前船と言うのは丁度日本海を通過して、富山湾に3ヶ所ある寄港地に寄って、船に乗って来た漁夫が「北海道に行くと魚が湧いているようなものだ」何処へ行っても魚が湧いているんだ。だからこんな所に行かないで北海道に行って働きなさったら金持ちになれるよ」と話をした訳です。

それを地主の庄屋が聞いて、「わしが一回蝦夷地に行ってみよう」と言う事で行って来た。その結果、やはりニシン、タラが獲れ色々な魚が沢山獲れた。それを実際に体験して

来て、初めて「こう言う所で小さな漁業で食うか食わずの事をしているよりも、そう言う所に出稼ぎに出た方が良いのじゃないか」と言う事で、明治初期、明治に入ってからこの北海道、蝦夷地に行く事を推奨したようです。

初めは半信半疑で10人15人しか行かなかったけれども、その内行って来た人の体験を聞いて、そして金を持って帰って来るのを見て、やはりその方が良いと皆さんが考えたのでしょう。それから毎年少しずつ増えて、そしてオホーツク海から東北、利尻、稚内ですね、あるいは日本海の小樽とかって、当時はニシンが豊漁で4月、5月になるとニシンが獲れるのですよね。

それでニシンが獲れて食料となる。食べる分はごく僅かです。獲れた分は捨てるのももったいないし、昔はそれを煮てそして稲の肥料に、綺麗に干して肥料にして日本国内に送ったそうです。そう言う風な形で非常に魚が豊富に獲れていたのが実態です。

歯舞群島、色丹と言うのは小さな島ですから、産業的には何も無い訳ですよ。ですから無人の島です。関東、岩手県の方は国後、択捉の方に魚場を求めたようです。と言うのは大資本が、やはり大きな所は、今のニチロ、ニッスイとかと言う大きな水産工場、あの人がここで魚場を拓いたと言う風な事を私は聞いております。ですから大資本家が行ったのは、国後とか択捉とかと言う大きな島ですけど、我々のような貧乏な家庭であれば、そんな資本も借りる事も出来ないし、富山県の船頭が根室、羅臼、知床半島辺りに行きまして、初めに親方を頼って行って自分がそこで働いて信用を得て、一人ずつ独立をして漁業をやりました。私達の先輩、富山県の私等は黒武士と言うのですけれど、生活が大変だったのを知っているものですから、「うちに働きに来い」と。そうすると何とか食う事が出来るだろうと言う事で、地元から沢山の若者を呼び寄せて漁業をしていた。その内には「俺は自分で仕事をしたいんだ」とか

「お前は仕事を真面目に良くやるから、うちの魚場を一つ貸すから仕事をしろ」と、こう言う風にしてお金が無くても仕事が出来た、そう言う時代だそうです。

それでこの未開の地であった歯舞群島、色丹島で色々仕事をしました。特にこの歯舞群島、色丹島と言うのは魚は沢山います。ですけれども、魚よりも一番手っ取り早く体を使うのは昆布漁なのです。歯舞昆布とか非常に良質の昆布が歯舞群島、色丹にあると言う事が発見された訳です。

それで昆布と言うのは、食べてもおいしいのですけれども、薬にもなる訳です。一方聞いた事によると、爆弾の火薬にもなるそうです。そう言う話を聞いておまして、薬と言うのは皆さんも傷に付けた赤チンキとかヨードチンキってありますよね、あれはこの昆布から取っている訳です。

私達、子供の時に浜に10月になると北東の風が吹く訳です。そして浜に色んな打ち上がった昆布を干しといて、それを焼いて灰にする訳です。その灰にした物をヨードの間屋さんに売る訳です。そうするとそれを水で煮詰めて、煮ると非常に綺麗な緑色の結晶が出来る。これがヨードカイエンです。これを今言ったようにヨードチンキとか赤チンキとかの原料にして消毒剤にする。それを今度、別の物と合わせると火薬になる。ですから非常に景気良く、その当時は良かったと言いますね。

それとその時には中国、中国大陸の方へほとんど兵隊さんが行く訳です。そうすると向こうは大陸ですから、ミネラルが不足する訳ですね。海産物が無いものですから、ミネラルとして兵隊さんに食わせる為に送った。その中継点となったのは沖縄なんです。

ですから、今、私は身勝手な事を言いますが、日本が一番昆布の消費量が多いのは北海道では無いのですよ、根室でも無いのですよ、沖縄なんです。沖縄は日本一の昆布の消費地、それから二番目が富山県なんです。

自慢でないけれども、それはやはり北前船の流れからじゃないかと、こう言う風に思っている訳でございます。

それで私達がそう言う風にして、小学校2年まで島に居た訳ですけれども、昔は今と違って、私も皆さん方よりもちょっと年上かな、ちょっとと言えば失礼かな、やはり大分年上ですけれどもね、自分は若いと思ってついつい、ちょっとと言う言葉になるのですけれども、当時は齒舞群島の水晶島と言う小さな島ですけれども、二つ学校がありまして、そして私達が複式学級といいまして、1年、2年、3年と4年、5年、6年と、こう言う風な形で学校へ、ただ複式だし、島ですから本当の勉強と言うのは出来ない。出来ないのじゃなくて、しないのですよね。学校へ行くのに自分の家の住まいから3キロも離れていますから、夏は夏でガスが掛かって嫌だ、冬は冬で雪が降って嫌だと。3分の1も行ったか行かないかと言うような状態なものですから、見たとおりの無学の人間ですけれども、そう言う中で親父も、今の親だとそんな事だと叱られて、それこそ長尺と言ってせっかんされたものですけれども、昔はそう言う事はなくて喜んで親が「おっ、お前休むか。それならうちの仕事をしろ」と、「昆布を干して、昆布を並べて切りなさい」と、一日一杯、勉強するよりもその方が大変だったのだけれども、今になってみれば、当時はそれが楽しかったんですけれども、納屋へ行って、作業所へ行って親の見よう見まねで、頭の根っこを切ったり尾っぽを切ったり成型する。

そう言う事ばかりさせられて、だから学校へ行って1年生、2年生と言っても、2年生になってやっと「あいうえお」でも、いろはの「い」でも書いたのでしょうか。そう言う風な生活でございました。そう言う島での生活の中にもやはり、私達子供は子供なりに遊びと言うものがあるし、自然を相手にした遊びと言うものがありました。

例えば皆さんが「いちご」って知っておら

れるでしょう。島はほとんど寒冷亜寒帯に属するものですから、特に齒舞群島と言うのはずうっと平地なもので、海の上にテーブルを乗せたようなもので、だから上がほとんど草原なんです。その草原に色んな、春には春の果実と言うか、野草の実がなって夏は夏、秋は秋、それぞれの四季に実がなるものですから、それを採って食べるのが私達の非常に楽しいひと時だと思います。

今と違って、島だから伝染病って無いのですよ。ですから何処で何を食べてもお腹を壊すとか、熱が出るという事はまず無かったように思います。それだけに、身体も何でも雑食人間になってしまっているんだと思いますけれどもね。春は春で山に行って、夏は夏でそう言う風な形で生活をして、そして暇があれば自分の浜で雑草を採ったり摘んだり、皆さんもご存知でおられるか、ハマナスと言うのがある。あれは非常に荒れたと言うか痩せた地でないと育たない訳です。ですから北方の島々の海岸に行くとハマナスが埋め尽くしているのですけれども、浜へ行くと昆布を干すには、やはり、少しでも広い干す場所が必要なのです。

そのために子供達で、私達はハマナスの根とか枝をつまんで除去しなければならない訳です。浜に生える雑草なんかは、これは私達も生活をしてみて分かったのですけれども、昆布と言うのは非常に露とか雨に弱い物で品物も悪くなるのです。ですから草とかそう言うものがあればそこに露が落ち、そこへ昆布を干すと昆布が3等、4等と等外になってしまうのです。ですから絶えず浜を綺麗にしとかなきゃ、良い品物は出来ない訳です。私は子供の時はやはり1年生、2年生でも朝4時半から5時に起きて、そして学校へ行くまでに1時間ほど浜の草むしりをさせられました。

浜の草むしりをして、そしてそれから学校へ行って帰って来るのは1時、2時。帰ってくると、今度は浜で親父が昆布を干していれば昆布干し、あるいは草むしり。そう言う風

な絶えず身体を使わされたもので、当時は嫌だなと思います。だけれども、そういう風な生活をして来ました。

そう言う中で当時は、戦後、戦前、戦中ですから、昆布の値段も非常に高価になりました。家族と、それから新潟、山形、秋田、青森の若い男の人か女性の方を手伝い員として頼んで行く訳ですよ。そう言う方々と一生懸命働いていると、私もお金は見た事が無いのですけれども、うちの親達が話すには年間大体、当時のお金で2,500円から3,000円稼いだそうです。

それから生活費と言うのは、ほとんど米とか味噌とかそう言ったものは家の方から送って貰うものだから、うちの母親も父親も実家が富山県ですから送って貰う。あと、副食の物は全部海と山から採れた物。海で魚が採れるし、山へ行けば野菜が採れるものだから、そう言う物で賄う事が出来た。ですから、生活するには何の不自由も無かったようでございます。私達もそんなに不自由とは思っていませんでしたけれども、やはり島ですから昔は甘い物とかと言うのは殆ど食べられなかったですけれどもね。生活するには不自由は無いと聞いております。

そう言う事で、当時は今と違って何とか家族が腹いっぱいご飯を食べて、食えると言う事はやはり一番の幸せじゃないかと、こう思うわけですね。子供が6人も7人もいるのだから、やはりそれをお腹一杯に食べさせる事が親として一番幸せでなかったのかなと、こう思っております。ですから、そう言う中で先程言ったように、2,500円から3,000円のお金が入ると、そこから雇っていた若い人の給料を大体1,000円位払う訳です。私達は貧乏な漁師ですから浜を借りている訳です、浜主から。そうするとやはり400円位払ったようです。そうすると手持ちで残ったのが1年間家族全員で働いて1,000円から1,500円だったそうです。

当事、もっと高いと思うのだけれども、富

山県辺りでは今現在45坪から50坪の家だったら大体3,000万円前後でしょう。それと匹敵する位の、その時1軒の家を完成させるにはやはり1,500円から2,000円だったそうです。そうすると当時の収入と言うのは相当大きなものだったと思う訳です。

ただ、話が変わりますけれども、当時はやはり私達の親達は島が生活の本拠ですから、そちらの方にお金を突っ込む訳ですね。と言うのは、金を持って仕事をしていれば残るのだけれども、元々身体一貫で行ったものですから、親方から借金をして1年から2年、3年、4年というように借金を返済して行かなくならなかった。だから何とか多少でも残るようになったのがちょうど大正10年位からじゃないですかね。大正10年、もっとかもしれない。

その頃から少しずつ残せるようになった。残せるようになったとなれば、当時はやはり、貧しい生活であるし、また資本も無いものだから、生活するのに家は丸太の掘っ立て小屋なんです。漁をする船はよそから借りて仕事をしている。

北海道、特に歯舞群島と言うのは、掘っ立て小屋なものですから雨露をしのぐには、むしろを上を被せて戸の代わりにしたり、あるいは壁に両側から板を貼って上から草を入れて暖房を取ったあったかい家に住んでいた。こう言う風な原始的な生活だったようです。少しずつ金が何とか融通出来るようになったら、船も欲しい、設備も欲しい、納屋も欲しい、家も少しましな物が欲しいと言う事で、ほぼ整ったのが昭和10年位かな、になったようでございます。その間はそれこそ血のにじむような生活と労働だったと、こう言う風に聞いております。

その昭和10年、私の生まれが12年なのです。やっと少しは余裕までは行かないのだけれども、生活の目処が付いたかなと言うのは私が生まれた年です。ですから、私達も苦勞と言うものを親から聞いて育って来ました。

私が関わったのは昭和60年ですから、この北方領土返還運動をして、富山の支部長をして現在までおります。やはり皆さん一人一人には故郷、多分、千葉県の人であれば、茨城県の人、埼玉県の人もおられると思うのです。北海道から来られている女性の方もおられるかも知れません。だけど、やはり私はこの歳になって夜休むとですね、何かしらやはり島の苦しい、或いは懐かしい、そう言うのを夢見る訳ですね。

人間の、やはり人生と言うものはそう言う苦しい中に、私達が生活した事、私はこの歳になってやっとそれは懐かしいと感じるようになる、苦しさが懐かしいと感じるようになって来ました。故郷があって、故郷と言うのは何かにつけても思い出される、それが故郷だろうと、こう思う訳です。

私は先程言ったように、島は平らな所に雑草が生えていて綺麗な花が、黒百合とかマーガレットとか春になったら綺麗な花が咲いていた。夏になったらハマナスの花が綺麗だなど、そう言うのを夢見る。これはやはり故郷と言うものだろうと思います。

私も先程言ったように、3、4年前に島に行きました。2回目に行ったのですけれども、自分の住んでいた所に行くと、一つ一つ草や木、石、波、海の色、全てが懐かしい。そうそれは昨日、一昨日のように思い出されるの

ですよ。これがやはり、故郷だろうと私は感じて来ました。それがやはり自分にある故郷なんだと、改めて感じた訳でございます。

私達はこの返還運動と言うものは、支えがあってやらせて貰っているのだろうと。私達元島民、あるいは北海道の人だけでこの問題が解決する問題ではないと思います。

お互いに日本国民の皆さん方、ご婦人さん、婦人会、青年団、青年会と、色々な団体の皆さん方の協力を得てですね、この運動と言うものを皆さん方一人一人が、その気持ちを汲んで頂いて、そして少しずつでも私達元島民の気持ちも理解して頂いて返還運動に関わって頂ければ、私も幸いだと思っております。

私も年に3回、4回県外の方に、出前講座をさせて貰っております。県内では小学校、中学校、高校の方に行きまして、そして皆さんにこのように話をしております。これは非常に長い、粘り強い返還の運動だろうと思えますけれども、私達は生活をした北方の島々と言うものは幾つになっても忘れられないものだなど、懐かしいものだなど、こう言う風に思いながら、今日はお話させて頂きました。

皆さん方にもこれからも色々と署名、或いは運動の機会もございましょうけれども、大変でしょうけれども、一つ力を私達にお与え下さいまして、一つ協力の程を宜しく願います。どうも有難うございました。



## 元島民二世の訴え



国後島元島民二世 堀江 則 男 さん

それでは皆様、お早うございます。本日はご縁がありまして、このように千葉県連合婦人会の皆様方の前で北方領土について皆様にお手前でお伝え出来るか。非常に緊張もしておりますけれども貴重なお時間を頂けた事、それと元島民の団体の一員として、皆様方に日頃ご協力を頂いております事を改めまして感謝申し上げます。本当に有難うございます。

まず初めに、私の簡単な自己紹介をさせていただきます。私は北海道釧路市の千島歯舞諸島居住者連盟釧路支部で返還活動を行っております。釧路市は根室の隣の市ですね。車で2時間、120キロ位です。1市4町からも大体それ位の時間です。根室まではJRが通っておりますけれども、中標津や羅臼は通っていません。道路の途中では必ず鹿が飛び出して来るので60キロ位でしか走れません。釧路と言えば、釧路川に掛かる弊舞橋なんかちょっと有名です。

その対岸には、少しの期間しかいませんでしたけれども、記者として在籍した石川啄木の像なんかもありまして、丹頂鶴、そして阿寒湖のマリモ、釧路市の直ぐ北側には広大な釧路湿原です。遠くから見ると綺麗ですけども、中に入ると谷地です。それと釧路は氷土とも呼ばれてアイスホッケーが盛んな事でも知られています。日本製紙クレインズという実業団のチームがアジアリーグで昨年優勝しています。

私は釧路市で生まれて釧路で育ち、地元釧

路の製紙工場に勤め、現在に至っております。4年程前に同じ工場内ではありますけれども、関連会社に転籍をして後数年で定年を迎えます。これからリストラとかが無かったらと言う私の個人的な予定なんです。趣味はと続けたい所ではありますけれども、自己紹介で終わってしまっただけは何にもなりませんので本題に入らせて頂きます。

私の両親は既に他界しておりますが、父親が北方領土の元島民でした。北方領土、北方四島とも呼びます。北海道の東、根室半島に連なる歯舞、色丹、国後、択捉の4つの島です。正確には歯舞と言う島はなく歯舞群島と言います。多楽島、志発島、勇留島、秋勇留島、そして今、語り部をやって下さいました吉田さんの水晶島、これらの島々を称して歯舞群島と言います。

北方四島は第二次世界大戦中の、日本の降伏直前に旧ソ連軍が1945年8月9日、当時有効であった日ソ中立条約を一方的に破棄して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に不法に占拠した事がこの北方領土問題の始まりです。

それから今年で69年が経過しましたが、未だ解決の糸口すら見えて来ない状態が続いているのです。私は戦後生まれですから島で生まれていません。生活した経験ももちろんありません。島での生活の様子やソ連軍占領時の事、島からの脱出、強制送還時の状況等に付いては、元島民一世の方々にお話を聞いたり連盟の資料や色々と調べたりした話となり

ますけれども、これも北方領土の事を語り継ぐ者、後継者の役目としてそれらの事を含め、私が後継者として北方領土の返還活動に携わるようになった経緯と、その時々での思い等についてもお話させて頂きたいと思います。

まずソ連軍占領時の状況ですが、北方四島は戦時中とは言っても直接戦火を受けませんでした。その事では平和に暮らしていたのかも知れません。ただ日本が負けた事、降伏した事への虚脱感を島民皆が持っていました。

その状況が覚めやらぬ8月29日にソ連軍が択捉島へ上陸し、9月5日までに全ての島々を占領しました。島民はソ連軍の監視下に置かれ、本土との連絡を遮断されました。ソ連軍は一軒、一軒家を臨検し、武器、ラジオ等を没収し、この時めばしい品は強奪して行きました。カメラ、万年筆、時計、特に仏壇なんかは何か大事な物が入っていると思ったのか、酷く荒らされたと聞いております。

その後も臨検と言う強奪、略奪が続いたそうです。この間、抵抗して撃ち殺された人もいたそうです。これから自分達が何をされるか分からない恐怖心から、島中に流言飛語が飛び交いました。若い娘は連れて行かれ乱暴される、皆、最後は殺されちゃうのじゃないか。恐ろしさのあまり、ソ連兵の監視が緩む濃霧や嵐の夜に、小船で島からの脱出を試みる家族も現れました。終戦時、17,291名いた島民の内、無事に島を脱出出来たのはその半分弱でした。荒れ狂う夜の海に漕ぎ出した結果、全島民の1割近い1,500人以上の人々の命が暗い海の底へ沈んで行きました。

その後、ソ連軍によって、島民の一斉調査と住民登録が行われ、身分証明書が発行されました。常時携帯を義務付けられ、行動も含め全てを管理されたそうです。この状況は強制送還のその日まで続いたそうです。

翌年の春、流水が無くなる頃にはロシアの民間人や労働者が島に沢山送り込まれてきました。しかし、彼らを受け入れる住宅や施設等ある筈もなく、必然的に日本人の家を仕

切って強制的な同居生活が始まりました。文化や風習の違い、モラルも異なる上言葉が通じない共同生活では、混乱は絶えなかったと聞いています。

日本の水産加工場はロシア人の管理の下で加工が行われ、ロシア人と日本人は一緒に働きました。作業を手早く済ませる日本人には、どんどんノルマが増えていったそうです。漁に関しても、漁業に熟知しているのは日本人なのでロシア人に指導を行い、島での農作物の育て方、越冬用の保存食の作り方等、色々な事をロシア人に教えたそうです。

そう言う生活に少し慣れた頃、突然強制送還の命令が下されソ連軍は日本人に対しソ連国籍を取得して島に残るか、強制送還を希望するかの選択を求めました。ほぼ、全員が送還を望み、1947年7月より翌48年10月までに、8,569人が7回に分けて送還されました。

一人何キロと持ち出す物の量も制限されたそうです。大事な土地、財産は元より、思い出や愛着までも置いて来なければならなかったのです。送還先は四島に最も近い根室ではなく、大きく迂回してようやく着いた所は樺太の真岡でした。そこで数週間以上、収容された後、日本の船に乗り北海道函館へと向かいました。

島からの移送船では、およそ人間らしさとはかけ離れた扱いだったそうです。沖合いに停泊しているソ連の移送船に乗り込むため、荷物の積み下ろしに使う大きなモッコ、網の袋で10メートル以上も吊り上げられ、そして船槽にすし詰め状態にされ、横になる空間すらありませんでした。また、トイレなんかは仮設のものがデッキにしかなかったため、我慢出来ずに甲板で用を足す人もいたそうです。甲板は汚物で汚れ、波が激しくなると嘔吐物や糞尿を含んだ波が船槽に流れ、頭から被る事もあったそうです。食事と言えば、一日に薄く切った黒パンが1・2枚、そして生の塩魚の切り身が少しでした。この不衛生で劣悪な環境のため、船の中で命を落とす幼子も

いたそうです。

ようやく着いた樺太でも、冬に向かう真冬の収容所は飢えに寒さが加わる厳しい環境です。体力の衰弱した病人や老人、幼子が栄養失調等で沢山亡くなっていったそうです。遺体は少し掘った穴に置かれていたそうです。そして、トラック一台分位になると、どこかに運ばれて行きました。その遺体に一握りの砂さえ掛けてやれなかったと、後に自分を責める元島民の方がおられたそうです。その時はスコップなんか無かったし、土もカチカチに凍って掘れる状態じゃなかったのです。

やがて、日本の送還船が迎えに来ました。その船内で出されたご飯を前に「マンマ、マンマ食べたい」と言って死んで行った子供を思い、「せめて、一口だけでも食べさせてやりたかった」と泣く親もいたそうです。

函館に着いて、消毒や様々な検査を受けた後に上陸し、その後人々は「必ず島へ帰ろう」と誓い合い、多くは島の見える道東の親戚縁者を頼りちりぢりになりました。日本に帰れたとは言っても終戦直後の事です。日本人誰もが自分達で精一杯の時代です。それからの元島民の生活が安定するまでの過程は、私等の想像を絶するような辛い厳しいものであったに違いありません。

それは、私の祖父母や父やその兄弟達も、同じだったと思います。私の父は国後島の出身です。国後島の爺爺岳の麓、留夜別村礼文磯と言う所に住んでいました。父は六男四女の三男として父母、兄弟達、そして隣には祖父母もいて暮らしていたようです。詳しくは分かりませんが、やはり、一家は昆布漁等の漁業で生計を立てていたようです。

父は酒に酔うとよく島の話をしていました。特に酷く酔っている時などは、ダラダラと同じ話を繰り返していたように記憶しております。あまり酒癖の良くなかった父の話す島の話は、子供だった私は好きではありませんでした。そんな状況でしたので、真剣に島の話聞いていません。父一家の島での暮ら

し振りなど分かる筈もなく、島から出た時の状況についてもほとんど分かりません。今思えば、どんなに過酷で辛い経験をしたのか、またその時どんなに恐ろしく、どんなに悔しく惨めな思いをしたのか、ほんの少しでも聞いて置けばと、今は思っています。

川には凄い数の鮭が上がっていた、冬でも釧路ほど寒くはなかったな。戦争中だと言っても腹なんか減らした事はなかった等々、もっと色々話した筈ですが酔っ払いのたわ言と思い聞く気の無かった私の記憶には残っていません。

私の父は三男でしたが、長男の伯父が島から出征し戦死しています。次男の叔父も。父母は、足が少し悪くなりちょっと痴呆が出て来た祖母の面倒を見ていました。実際に面倒を見たのは私の母親ですけれども、その祖母も晩年は寝た切りとなり、痴呆も酷くなりました。

でも、「島は良いよ、島に帰りたい」とよく言っていました。目に涙を一杯溜めて。祖母にとっての島の暮らしはそんなに楽しかった事かと、私は不思議に思います。沢山の子供を抱えて、昆布干し等は重労働ですから肉体的にも決して楽ではなかっただろうと思います。でも祖母の頭の中では、家族皆で暮らした島での楽しかった思い出しか残っていなかったのかなと、今は思います。

その祖母も平成3年に92歳で他界し、その一年後には父が61歳の若さで亡くなりました。私はと言うと、その後も北方領土や四島の返還の事等考える事もなく、島への特別な感情もなく過ごしておりました。平成15年には母も亡くなり、その時に色々整理をしていた時に初めて、千島歯舞諸島居住者連盟の会員だった事を知りました。父が亡くなってからも配偶者として会員継続していたのですね。

元島民でなかった母が何故そうしていたか。今となっては母に聞く事は出来ませんけれども、その後千島連盟の釧路支部の指導員と言う方が来られて、連盟の活動や状況等を

詳しく説明してくれて、元島民後継者として会員継続して欲しいと言われて。島民じゃなかった母も継続していたのだから、会費も大した事ないし軽い気持ちで入会しました。

その後、間もなくして、今は亡き釧路の支部長さんが何回も何回も私の所に来ました。「これからは一世の高齢化に伴い、後継者の役員が必要なので是非やってくれ」と。本当に一生懸命お願いをされたので、平成15年に釧路支部の役員になりました。各支部に、15支部あるのですけれども、後継者の組織である青年部が出来ていた頃でした。

その頃の私は、会社では管理する立場となり本当に仕事も、言い訳ですけれども忙しくて家には寝に帰るだけの状態の時もありました。支部の役員会に出るのもようやく、要請のあった署名活動の手伝いもままならない状況ではありました。ありましたが、それでも出来る限り参加し、活動をしておりました。

また、一世の役員さんの中には、私の父と同じ地区の出身者がおられ色々な話を聞く事が出来ました。と言うより、私の方から聞かせて貰いました。一世の方の話を積極的に聞いたのは、自分が父親の話していた島の話聞いてやらなかった事への後悔と自責の念も多少あったと思います。

その後、私は父の同級生だったと言う会員さんを紹介して貰い、その方の所へ行き父の子供の頃の話や島での暮らし振りなど、沢山の話を聞かせて貰いました。その方が自由訪問で島へ行かれた時のビデオ等も拝見させて貰い「これが堀江君の家があった所だ」。この映像がそうなんですけれども、草だらけの沢のような所の映像を静止画にして、一生懸命説明され何度も何度も見せてくれました。その映像を見た私はと言うと「ああ、そうなんですか」とは応えていましたが、初めて見る原生林だけの写っているその映像では、正直、感動はそんなには湧きませんでした。

また、私が返還運動を行っていく上で、もう一つ心のきっかけとなった事があります。

沖縄での体験でした。私が沖縄へ行った時、そこで訪れた平和記念公園での事です。ここには、沖縄戦で亡くなられた多くの方々の名前を刻んだレリーフ、平和の礎があります。軍人はもとより、多くの沖縄の犠牲となった一般市民、そして敵でもあったアメリカ人もです。

その数に圧倒され、戦争の恐ろしさ、悲惨さを改めて強く感じました。レリーフは全国都道府県別に並んでおり、北海道は北海道・樺太の区画。私はそれらの中に伯父の名前を探しました。暫く掛かりましたが釧路・根室の区画に伯父の名前を見つける事が出来ました。堀江マサオ、この名前を見た時に本当に本当にやり切れない気持ちになりました。

国後島から出征したと聞いています。故郷からこんなにも遠い所で亡くなっていました。もちろんもっと遠い南方で亡くなられた方々も沢山おられます。

でも伯父さんの魂は故郷の国後へ帰ったのでしょうか。帰った故郷の島は、ロシアが実行支配をしています。肉親は誰一人いません。日本人が一人もいない故郷の島へ帰ったのでしょうか。そんな気持ちになりました。

私達の千島齒舞諸島居住者連盟は、元島民とその後継者で組織する団体です。今年3月末現在の会員数は3,910人。その内訳は元島民の方々が2,177人、私のような二世の後継者が1,733人です。この返還運動の中心となって旗を振って「必ず島へ帰ろう」と誓い合っていた元島民の方達が年々少なくなって行っています。

私はこの気持ちと運動をこれからも引き継いで行こうと思っております。私達の組織は本当に小さなものです。ですが、ここにおられる皆様方のご理解とご協力を頂く事で、関心を持って貰う事で、少しずつでもこの返還運動の輪を広げて行けるとも思っております。毎年一般の方から募集をしている北方領土返還運動の標語があります。その沢山ある中で私が気に入っているものをご紹介します終

わりたいと思います。

「四島返還 あなたの声こそ 力です」北方領土、北方四島は今も日本です。ロシアから返還されるまで訴え、叫び続けましょう。どうぞ一緒に宜しくお願い致します。長時間に亘りご静聴有難うございました。



## 【鳥取県会場】

- 開催日時 平成26年10月5日(日)
- 開催場所 鳥取県倉吉市
- 開催団体 鳥取県連合婦人会
- 参加者 200名

### 元島民の訴え



択捉島元島民 **武 田 勝 三** さん

皆さん、お早うございます。今日は忙しい中を、こうして多くの方々にお集まりを頂きまして、北方領土のお話を聞いて頂けると言う事で、ここに来るのを楽しみにして参りました。

実は、私が今住んでいるのは北海道であります。北海道と言っても過疎化の町、22,000人の小さな町でありますけれども、稚内と知床半島の間にあります。流氷が来る町として、そして流氷の中を航海をする「ガリニコ号」と言う船、水産の町であります。

今、元島民二世の方が力強く色々お話をされました。私は一世と言えども二世が一番近い一世になります。戦後70年ですから、70位には見えないと思えますけれども、今年72歳を迎えようとしています。

先ず、皆さん北方領土問題の始まりは何だったのでしょうか。これは第二次世界大戦が始まりであります。第二次世界大戦と言うのを経験した方はここにはいらっしゃいませんね、皆さん、若いですからね。さて、昭和16年8月に、択捉島の単冠湾と言う所に日本の海軍が30隻の船を集結をしました。そして真

珠湾攻撃に向かいました。そして南方の方では、多くの兵隊さんが犠牲になりました。

そして広島に原爆が落とされます。長崎に原爆が落とされます。戦力は段々無くなる、14歳、15歳の方々が戦争に行きました。そう言う中で8月15日、終戦を迎えます。その時に、私、個人的にですけれども、北方領土の占領と言うのは、北方領土から始まって、あの内戦があつて、そうして北方領土をソ連に盗られた。私はこう考えているのですけれども、皆さんはどうでしょうか。

じゃあ、どのようにして北方領土を盗られたかと言いますと、ここからカムチャッカ半島まで20の島が連なっています。その二つが今の言う国後、択捉、そしてウルップ、シュムシュ島で終わります。これを千島列島、北千島、南千島と呼んでいた時期もあります。今で言えば南千島と言ったら駄目ですよと言うっておりますけれども、その時にここにあります歯舞群島と言うのは、元々、根室の歯舞町の部落でありました。

さて皆さん、先程言いましたように千島列島には20の島々があります。そして8月15日

に終戦を迎えます。ソ連軍がやってきたのが、このカムチャッカから一番先にあるシムシム島と言う所、これもあまり知られていないのです。カムチャッカに日本の第11戦車大隊と言う日本の軍隊がいたのです。

朝もやの中、ソ連の軍艦が3隻だったそうでありました。そしてずうっと、そこで3日間戦いました。ソ連の軍艦が大き過ぎた。そこにタケダ浜と言う小さな海水浴場的な砂浜があったそうでありました。船が岸まで着けないものですから、ソ連の兵隊さん達が武器を担いで、海中に飛び込んで上陸したそうでありました。

さて、飛び込んだ兵隊さんも死にました。丘まで着けません。そして丘まで着いた兵隊さんと日本の兵隊さんドンパチをやる訳ですね。ですが、ソ連の兵隊さんの背負っている銃器は水で火薬は消えます。そこで殴り合いの戦闘が2日間始まったそうでありました。そのいきさつについては、色々書かれている物を読みましたけれども、手を合わせて、そして小さな子供達の写真を示して、「殺さないでくれ、殺さないでくれ」と言うソ連兵もおります。が、しかし、殺さなければ殺されると言う証明がされているものもあります。そう言う戦闘が3日間始まりました。そして亡くなりました。

それが終わる直前に日本軍の長の人達10人が、ソ連の兵隊長の所に10人で出掛けたそうです。こんな事をやってもしょうがないから、どうするこうすると言う事で、その10人の内の6人も殺されたそうです。ですから、日本兵より相手の数字は良く分かりませんが、そこでようやく停戦がされました。

ずうっと20の島の18を占領するつもりでいたと。3日、4日間掛けて占領地にロシアの旗を立てて、この第一軍はカムチャッカに帰る訳であります。

じゃあ、今度はどうなったかといいますと、ここに樺太、今で言うサハリンがありますね。サハリンに大陸から兵隊を集めて、日本人を

やっつけて北方領土の占領が始まる訳であります。

そして朝もやの中、皆さん、リーフレットに名前が入った所があると思いますから、それをちょっと見ながら、後ろの人は見えないと思いますけれども、ここに紗那と言う町があります。ここが択捉島の大会、政治行政、ここに紗那郵便局が今でも骨組みだけ残っています。これが日本の建物で唯一残っているものであります。その郵便局にいきなり揚がって来たそうです。電信・電話を一番先に封鎖をしました。音信不通であります。

そして、ソ連の兵隊さん達が揚がって来ます。どうでしょう、皆さん。今であればテレビを観たり、町の中でも外人の顔を見た事の無い人は誰もいないと思います。当時、年寄り和我々が生活していた時代ですよ、青い目をした兵隊さんが軍服を着て銃を持って目の前に現れたらどうですか。

そして、日本人は靴を脱いで上がりますけれども、家の中に靴のままドンドン入って来ます。そして銃を突きつけて、物を欲しがったそうですね。一番欲しがったのは時計だったそうです。そう言う物を欲しがって、仏壇だとか押入れとか持って行ったそうです、当初は。

さあ、島では大変です。見た事の無い奴等が鉄砲を持って土足ですから。そこで先ず、女の子は髪を切ったそうです。そしてカマドの墨を顔に塗って、おっばいの大きい人は上に晒しを巻いて、男に変装をさせたそうです。小さい子供達は室に、北海道の方ではしばれるものだからね、家の中に物を貯蔵する所があって、それをムロと言うのです。ムロだとか屋根裏に隠したそうです。

さあ、てんやわんや。やはり、日にちが経って行きます。そして村民の一斉調査が始まったそうです。何処の生まれで兄弟は何人か、そして身分証明書を持たせられます。その身分証明書を持つと自分の町だけは行動が出来たそうであります。

船の航行や何かは全然許可されないし、もし船が出て逃げるなんて言ったら、撃たれたそうです。現実には死んだ人も私達の町では数名出たと言われております。

長い人で3年間、ロシア人と生活をしておりました。ロシア人は当時、魚を捕っても食べ方が分からない。畑に菜っ葉が出来ても食べ方が分からない。何も分からない訳です。それでそう言う面で、ロシア人とだんだん意思疎通が出来て行ったそうであります。そうすると、やはり、ロシア人も色々な物を持って来る、こっちからもあげる、その内に言葉も少し通じる、そう言うような感じです。

そう言う話を電信も電話を聞けなくても、やはり住んでいる人に伝わって行きます。じゃあ、島民はどうしたのか。それには3つの行動がありました。その一つは自分で逃げるそうです。自分で逃げるのは齒舞や色丹の人、国後の近い人達なのです。そこに、悲劇が生まれる訳であります。自分の小さい船ですから、9人乗った人が4人船の中で死んじゃった。海が荒れてどうもならんから丘に着けてみたら、そこには夜が明けて見たら、死んだ人がたくさんいる。どうにもならないから、町の人は騒動が治まったら、ちゃんと埋葬しようと思って、ただ、ちょっと高い丘の引っ込んだ所に4人を埋めて、その辺から木を拾ってきて埋めて、そして命からがら逃げたとか。30何人も乗せて、そして根室港に向かったら、根室港の前で全部死んじゃった。そしてここから根室が近いものですから、この辺の人達が助けにこっちから助けに来てくれた、そのような事もありましたけれども、その悲惨な思いというものは島民が綴った書いた物が今、沢山あります。

もう一つは、それはロシア人も日本の力を必要となってきた訳でありますから、「あなた方、ロシアの戸籍をあげますから残って一緒にやりませんか」と言う話が出て来たそうでありますが、それには一人も応じなかった。

そしてもう一つは強制送還であります。こ

れは最後が昭和23年、私達は昭和22年の8月でした。ロシアの貨物船に、ここに停まりますね。そうすると紗那だとか、留別だとか、薬取だとか、小さい部落があるのですよ。そこから小さい船に乗せて大きい船まで連れて行って、その荷物を揚げ降ろしするような風呂敷みたいな網で出来た物に入れて、吊り上げて10数メートルの船底に入れて集める。そして根室か釧路かに向かうと思ったら、樺太に向かった訳ですね。今のサハリン、サハリンの真岡の日本の女子中学校の校舎に入れられます。

それもですね、吊り上げられて恐ろしい思いをして船底に入れられる。そして船が出発する。根室か釧路か何処か北海道に来ると皆さん思っていたそうです。そうすると、10何メートルと言うからこの位あるのかな、それで梯子を使っていた訳だそうです。そこで生まれた子供もいた。小さい子供もごちゃまぜに詰めてあるものですから、トイレや何かは甲板に上がらなければなりません。そして上がっても、その1,500人も2,000人もいる中にトイレが6つ位しかなかったと聞いていますね。

そしてある留別村の漁業の経験のある人が、夜、甲板に上がってみますと、北斗七星が見えたそうであります。それは何故、北斗七星かと言いますと、この地図から言いますと北斗七星と言うのは大体この角位に当たりますね。ですから、ここから根室や北海道に向かうのであれば右に見えなければならぬのです。それが樺太、ここに向かうものですから左に見えた訳なんですね。そうすると、それを船の中で話すと、大変な事件ではありませんけれども沸騰してしまって、収めるのに大変だったと言う、そう言うお話も母ちゃんから聞きました。

さて、色々お話も沢山したいのですが、ちょっと時間がありませんので端折ってしましますが、私達はそうのようにされてここで30、40日、黒パン、それからニシン、魚の

塩漬けのしょっぱいの、そんなのが当たり前だそうです。そして私達の荷物は何人家族でも30キロ以上は駄目ですよと言う制限がありました。ですから食べるものは一切なし、そしてここでストーブも何も無い生活をし、そして函館まで連れて行く訳です。函館の日本税関に手続きをする訳です。そして函館と日本ではちょうどコレラが流行ったので函館で一ヶ月、船の中の生活をさせる、そういう事もありました。

それともう一つ、私が心の中で悩むのは樺太に日本船が迎えに来て、乗る直前に、4ヶ月の子供が死んだのであります。それを届けると置いて行かなきゃならない。それで背負って船に乗ったもので、そういう色々な事が書かれている本がありました。お伝えをしておきたいと思います。

まだちょっとお話をしたい事があるのですが、けれども、じゃあ島の様子をちょっとお話します。愚痴ばかり言っているかもしれないから、私が生まれたのは、その小冊子のここにあります入里節ってありますね、ここで昭和18年2月3日です。1943年ですから二世なんです、本当は。だけど、一世の人は皆、死んじゃったのですよ。17,291人の引揚者が今生きているのはなんぼかと言うと、6,800人です。その6,800人も、もう亡くなっているのも不思議でない歳の人が混ざっているのです。

何故そうかと言いますと、色々調査して参りましたがけれども、個人情報保護法と言うものが邪魔になって、出来なくなってしまったのです。ですから今、一生懸命やっていますけれどもね、ですから11,000人の人が死んでしまいましたので、私が元島民として通用するように、残念ながら混ぜてしまおうと。そしてここの鳥取ですね、このように集まって頂いて、お話が出来た。これは私の人生の中でも一番の盛り上がりであります。

実は、今年ここに紗那に5年振りに行ってきた。子供達を、子供達と言ったら怒られる、学生さんを連れて行きました。そして

ちょうど、隣の県の島根県の生徒が二人と先生と教育局長さんが来てくれました。5年前にも行ったのです。その時にはその前に行った時と町の中は同じだったのです。僕もこの辺の町は分からないけれども、北海道と言うと牛を一頭入れるうさぎ小屋みたいなので、そういう本当に我々を追い出してから建てたそういう家しか住んでいませんでした。

それがここ2年半で、この紗那村、内岡この間は約4キロなんですよ。この4キロを車で走っても精々出しても40キロ位、20キロから25キロから必ずこれがあって走れなかったのに立派なアスファルト、左側に花畑。ここに別飛ってあるのですよ。「別に飛ぶ」と書いてある所ね。ここにも人が住んでいるのです。約20キロあるのですよ。その中間に飛行場が出来たのです。ここもアルファルト。紗那の町の中は、見た感じ絶句かな。ちょっと入ってしまえば良いけれど、赤い所から見たらアスファルト。その掘っ立て小屋であった町が、先程言いましたように綺麗な町に変身していました。それは決して国がやった訳でもないし、紗那村がやった訳でもない。国のお金も入っておりますけれども、ギドロストロイと言う水産会社なんです。そのギドロストロイと言う水産会社が、紗那の為に、択捉島、国後島、色丹島の水産を一手にやっているのです。それと土木、これも一手にやっている。

ですからその丸いCでもないのですね、ちょっとこうやってギドロの字の変形かな、それにSと言うマークが建物にはちゃんと付いているのです。これはギドロストロイの体育館であり、文化会館であり、幼稚園である。ですからこのギドロストロイと言う会社のお金でこの町の行政がなされて、余った金が払いに流れているというお話もあります。

ですから建っている物を見ますと、つまようじを組んだような体育館です。あんな物は地震がぐらぐらときたら直ぐ潰れる。おっかなくて入ってられないような家ですけれ

ど、そのようになっています。じゃあ古い家は無いのかと言いますと、古い家はあります。それは三階建ての木造の国営のアパートというのですかね、それには全部ペンキをぬっちゃって、ですから綺麗に見えるのです。そう言うような状態です。

択捉島、この面積は皆さん方の鳥取県と約同じであります。面積はちょっと鳥取の方が大きいですが、約同じであります。そして長さはと言うとちょっと地図で調べてみたら兵庫県から境港まで約100キロちょっとなのですね。正確にはわかりません。ですから鳥取の境港、ひっくり返すと、ですからちょうど長さが倍で面積が同じですから、如何に細い島かと言うのが分かって貰えると思います。

もう約束の時間になりましたけれども、私もまだ若いですから、これからも続けて行こうと思いますけれども、一つ皆さんの力を借りながら精々頑張りたいと思います。今日は誠に感謝を申し上げたいと思います。

お蔭様で前段で話しましたシムシム島の遺骨収集を日本でやっておりませんが、今もロシアで日本の戦車をカムチャッカに運んで、本国に持って行って展示するそうであります。そのロシアの兵隊さんの遺骨収集の時に、日本の兵隊さんの軍刀と日本兵の遺骨が6体、見つかったそうです。そして日本にも通知が来まして日本の政府も今後、遺骨収集をしなければ駄目だという、そう言うようなお話もこの前の新聞に出ておりました。そう言う事であります。

では皆さん、故郷、これは私の信頼する島民からですが、今年97歳で死んでしまいました。故郷と言うのはどう言う所なのか。懐かしい所とか生まれた所とか、色々その気持ちの高まり、高揚を高める言葉だと思えますけれど、その御老が「俺が行って死ぬ所」とそう言いました。本当に情けない話だと。

約束の時間が来ましたのでこれで終わりますけれども、どうか皆さん一つ一つ今までもやって頂いておりますけれども、これからも宜しくお願い致します。有難うございました。





国後島元島民二世 舘 下 雅 志 さん

皆さん、お早うございます。北海道の道東、中標津町から鳥取県にやって来ました。中標津には空港があるのですが、鳥取まで飛行機を3回乗り継ぎました。出発したのが午後1時で、ホテルに着いたのが午後9時5分で長い旅でした。

今日と一緒に武田さんと言う元島民の方と一緒に来たのですが、私は千島連盟と言う北方領土からの引揚者の団体の青年部、後継者の代表をやっております。やっと去年千島連盟にも後継者活動委員会と言うものが出来まして、このような代表をやっております。これから北方領土の島民がどんどん歳をとって、引き継がないといけないと言う事でこれからも頑張っていくと思っております。

私は、母が国後島の古釜布という昔も今でも一番人口が住んでいる地域に住んでいました。現在はロシア人が8,000人位住んでいます。

当時、日本人が6,800人ほど住んでおり、うちの母は豆腐屋の娘として暮らしていました。父親は林業をやって生計を立てて暮らしていました。

昭和20年の終戦では、島から逃げた人達と強制送還と言う2つの引き揚げ方があるのですが、うちの母と親族は強制送還させられサハリンの真岡と言う収容所を経て、函館に入り根室に戻ると言う辛い経験をしました。僕の従兄弟等は、引き揚げの途中小児麻痺に患かちまして、現在足を切断して生活しています。

今日は何を話そうかなと色々思ったのです

が、昔の話は大先輩の武田さんがしてくれるので、私は島の様子を少し話したいなと思っております。

まず僕の母親が暮らしていた国後島の長さは、知床半島より長い122キロ、その上の択捉島が204キロあります。択捉島が日本で一番大きな島です。二番目に大きいのが国後島、三番目に大きいのが沖縄本土です。

その島で大変盛んなのが昆布漁でした。婦人団体の皆さんには、根室の歯舞昆布を購入して頂いていると思います。国後島で採れるのが、昆布の他に鱒や鱈やカニやウニが多く、漁業が大変盛んな町です。僕もビザなし訪問で5回ほど国後島に行っています。

国後島への訪問は平成4年が初めてで、ビザなし交流を初めて2年目の時です。ビザなし交流が始まった時の古釜布と言う町は、鶏が町を走っていて牛が町の中にロープで繋がれていて、僕が生まれた時の中標津町の様子と大変似ていました。もちろん舗装も無く、歓迎会の時に割れたグラスだったり大変貧弱な生活をしているんだなと思えました。また、東方沖地震が起きた時には、日本の援助が欲しいと言う事で中間地点で物資援助をしました。カップラーメンだとか、女性であればストッキング等を島に送った記憶があります。

この交流が始まる前には、光のメッセージと言う光信号でロシア人と交流をした事があります。

2010年にメドベージェフが国後島に来てから、大変多くのロシア人の要人が島に訪れて

ます。先月もイワノフ大統領長官とトルネフ秘書が択捉島に来ました。それは択捉島の空港が完成したと言う事で、それをお祝いする目的で来た訳なんですけれど、その時に来年度から10年計画で日本円にすると1,800億から1,900億のお金をクリル地区の発展計画にお金を投入すると。

日本とロシアが交流している中で、やはりロシアは私達を見捨てないで見ていると言う風になって来ております。だから、私達も交流は続けているのですけれども、大変危ない状態がこれから続くのではないか。島には空港は出来ましたし、海岸整備も、幼稚園なんかも。昔は色の付いていない町だったのですが、オレンジや青や色々な色の住宅も増えましたし、公共施設も出来ています。また、水道など色々な施設がどんどん出来ています。どんどんロシア化しています・・・。

さて、鳥取県の皆様には「食の都ー鳥取フェスタ」で、北方領土のパネル展や署名活動をして頂いていると言う事を聞いていますし、8月には横断幕を掲示して頂いていると言う事を聞いています。また去年、鳥取県の南部町の中学生内田すず子さんが北方領土に対するスピーチコンテストで最優秀賞を採ったと言う話も聞いています。このスピーチコンテストは、約5,000人位の全国からの応募の中から選ばれて最優秀賞になったそうです。

私も後継者の仲間が根室管内に280人いま

す。本部にも後継者の集まりが出来たので、全道各地13支部網羅してこれから活動していきます。

1月には、北海道の札幌駅の地下街でも初めての後継者フェスタをやろうかなと思っていましたし、後継者がどんどん中心となって北方領土問題に取り組み、後継者の仲間を作りながら活躍して行くと言うのが、僕ら元島民後継者の役割だと思っております。

私にも夢があるのですが、先程言った野付半島から国後まで16キロ。たった16キロなのでトンネルを造りたいと思っております。トンネルを造ると、たった20分で国後島に行けます。ぜひトンネルを掘って欲しいです。

この辺はやはり流水があるので、貴重な野生鳥類とか、知床世界遺産もありますので、是非トンネルを掘りながらロシア人と仲良くして行った方が良いのかなと思うし、そんな方向へ返還運動を進めて行こうかなと思っております。

私も昨年、ちょっと大動脈乖離と言う病気をやりまして、どうしようかなと思ったんですけど、まあ、手術もしないでこうやって元気なので、この運動をこれからも力強くやって行きますので、鳥取県の皆様にも是非ご協力を頂きたいなと思います。簡単ですけども私のコメントとさせていただきます。どうも有難うございました。



## 【秋田県会場】

- 開催日時 平成26年11月7日(金)
- 開催場所 秋田県大仙市
- 開催団体 秋田県大仙市地域婦人連絡協議会
- 参加者 150名

### 元島民の訴え



択捉島元島民 櫻井和子さん

皆さんこんにちは。今日は宜しく申し上げます。北方領土は、北海道本島の東北の海に浮かぶ択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の4つの島々からなっております。北方領土は日本固有の領土で、元々あるもので後から与えられたものでもありません。

歴史的に見ましても1644年ですから今から370年ぐらい前に、日本で天保絵図という地図を作った時も、既に択捉島、国後島と証明しております。また、松前藩が北方領土の警備にあたりして、早くから択捉島の岬に大日本択捉という標柱を立てて日本領土であるということを証明しております。

また1866年には日露通行条約という条約を結んで、択捉島から南は日本領土、択捉の隣ウルップ島から北はロシアの領土ということ条約ではっきりと決めております。

北方領土は動物類もたくさん住んでおりました。トドとかオットセイ、アザラシ、キタキツネ、エゾウさぎ、エゾテンとか、その他に鳥のエトピリカとかハヤブサ、ウ、白鳥、たくさんの鳥がおりました。また自然の資源が豊かなものでヒグマもたくさん住んでおり

ました。

北方領土には暖流と寒流がちょうど交差する、ぶつかっている地域なので水産資源も豊かで、世界三大漁業の一つ千島漁業としても非常に栄えておりました。また、水産物としては鮭、マスはもとより、蟹類、ウニ、ホタテ、昆布、ワカメ、海苔、非常にたくさんの物資があり、私は子供心にもここでは海苔を獲っても昆布を獲っても、何を獲っても一生生活出来る場所だと思いました。それに施設としましても、鯨も獲れましたし、私の村は捕鯨場がありましたから、捕鯨場や缶詰工場、また孵化場とか色んな施設がありましたから、遠く秋田、青森、函館からもたくさん出稼ぎの方が来て、当時村の人口の2倍3倍にも多くなった時がありました。

水産物、鮭、マスはもとより、タラ、ホタテたくさん獲れました。エビもたくさん獲れました。私は小学校5年生まで択捉島で生まれ過ごしていたのですが、小学校5年生の時に島を離れて函館に参りました。小学校の思い出と言いますと、隣村の運動会には必ず友情出演というのか、4年生以上の生徒が15、

6人、隣村は3里半ですけれど今の計算方法では14キロもあったんです。そこへ必ず皆でお弁当を持ってリュックを背負って、3時間余りもテクテク歩いて参加したものです。途中熊が出るので、父兄の人たちが馬に乗って、熊避けのラッパを吹いて守ってくれました。その中に父の姿を見て非常に嬉しく思いました。

小学校は教室が1つしかなくて、校長先生兼用務員さんという感じで、机の並べ方で学年が決められて、右を見て1年生、左を見て2年生という感じで1日に1時間しか授業は受けられませんでした。その時、将来先生の資格を取って必ず島に帰って先生のお手伝いをしようと心に誓って5年生で出てきましたが、ついにその夢は叶えられませんでした。

また皆で釣りもしました。ただ海が寒流のために泳げないので、沼や川で泳ぎました。また、村の真ん中に栈橋があって、その栈橋を渡っては釣りもしました。アブラコがよく釣れました。赤、緑、黄色、茶色のような色ははっきりとしたアブラコがたくさん釣れました。また学校の周りには松の木があって、その松の実が普通見る松かさよりも、ひとつの大きさが10センチぐらいもあって、そのかさを手繰ってお米の2倍ぐらいの大きさの松の実を、よく皆で休み時間に取って食べました。

また捕鯨場もありましたから、捕鯨船が汽笛を3回鳴らすと鯨が獲れた印なんです。その音を聞いて、みんな解剖を見に15分ぐらいの道のりを急ぎ足で行きました。大きな鯨が、鉄のワイヤーなようなので尻尾を縛られて解剖場に上がってくるんですけれど、ちょうど薙刀のような長い50センチぐらいの刃渡りの包丁のような長いのを持ってすぐ解剖が始まるんです。するとおじさんが、必ず解剖している方が、白身のすぐ下の「すのこ」って私たちは言ったんですけれど、霜降りのところを20センチ角に切って、持って行って食べられていう感じでいつもくれました。夜でも

夜中でも、鯨が獲れると解剖が始まるので、夜などは白い脂、白身のところを松明のように入れ物に放り投げて、バリバリバリバリっという音を立てて松明のように火の粉が上がり、その明かりで解剖する人の手元を照らしておりました。電気もなくガスもなく水道もない、今の方から見るとなんと不自由だと思いでしょうが、村の人たちは何の不自由も感じないで仲良く楽しい生活をしておりました。

それが1940年日本は世界を相手に戦争を始めてしまい、第二次世界大戦となりました。その約1か月前なんですけれど、12月8日が戦争勃発の日ですけど、11月だと思いますが、朝起きると私の家の前が単冠湾結構深かったと思うんです。5隻6隻と、朝起きるたびに軍艦がとまって、40ぐらいいいたと思うんですけれど、すごく大きい航空母艦などは少し沖の方にとまって、港いっぱい軍艦になりました。そして村の人たちには、軍艦を見てはいけないとかそういうお触れが出たんですけれど、望遠鏡で窓からこっそりと見ていました。

日本の海軍さんは、昔セーラー服で帽子のリボンをなびかせて、船の後ろの方の欄干のところで、船と船の手旗信号という信号をしておりました。夜は夜でサーチライトというんでしょうか、空に向かってなんせ軍艦から青白い閃光を空にはなって、不夜城のように明るく、ランプの生活しかしていない私たちはびっくりして眺めておりました。後からの話ですが、そこから真珠湾に向かったそうです。

戦争も初めのうちは戦果を挙げて、シンガポール陥落とかそういうニュースを聞くたびに、私たちは提灯行列などをしてお祝いしたものです。日本もだんだん敗戦の色が濃くなって、ついに広島、長崎に原子爆弾を落とされてとうとう終戦になりましたけれど、その終戦の日のわずか6日前にロシアが急に参戦しました。それはおそらく、原子爆弾があ

んなに落とされて、日本にはもう勝ち目がないと思ってからの手段だと思います。わずか6日前に参戦して、急に島を全部取ってしまいました。はじめ私は、5年生から函館に出ておりましたから、その終戦当時の様子 of 島のことはわからないんですけど、両親や兄弟やみんなから話を聞きました。終戦が8月15日で、25日から8日にかけて進駐軍が入ってきたんですけど、日本はアメリカと戦争したからアメリカの兵隊だとみんな思っていたらしいんですけど、銃は突きつけているんですが服も破けているし、靴もぼろぼろという感じの兵隊さんたちだったので、みんなびっくりしたみたいです。まさかロシア兵とは思わなかったみたいです。

私の家も、郵便局とか駅通って昔の名前ですが旅館をやっていたので、郵便局に一番先に来て、通信施設を全部破壊されたようです。それから旅館の方には土足で銃を突きつけて上がってきて、私の祖母や両親兄弟もみんな前の小屋、物置小屋に入れられたようです。それからそこでみんな1年8か月も頑張っ暮らしてきました。

ロシアの人たちは日本の着物がすごく好きだそうで、着物と物々交換でパンとか野菜を交換して食べていたようです。私の祖父は明治26年から釧路の警備隊を経て、若い時に島に渡り、それから50年余りを厳しい環境の中で開拓に従事してきたのですが、駅通から駅通は全て交通機関は馬なので、馬も50頭ほどいたんですけど、それも全部ロシアに取られてしまいました。

終戦後まもなく、私が生まれた択捉島にも、暁部隊という軍隊が入っておりまして、どこかへ連れて行かれるような感じだからと言って、みんなもし内地へ帰ったらなんとか届けてくれということで、私の両親のところ写真とか手紙とかをみんな持ってきたそうです。引き揚げる時も急に船に乗れという感じで、少しでも物を置いていくように考えていたみたいで、私の母は今はステンボルがあ

るのでちょっとわからない方も多いと思うんですけど、昔は魔法瓶と言ってガラスで出来ていて、それを守るために周りに1センチ以上の空間があるんです。そこに預かった手紙や写真などをびっちり詰め込んで、見つからないように持ってこれました。

引き揚げる時、馬も取られ全てを取られた祖父がリュック1つで帰ってきましたから、どんなにか無念だったと思います。私もひとりで函館にいた、7月14、15日と函館空襲がありました。それに対して、島の父から変わりはないかとか無事かという電報が来て、私も元気であることを伝えようと思って、本局に電報を打ちに行っても海外向けはダメだということで、全然こちらから通信することができず、両親も私が元気であるかと思いがら、私の影膳を据えてくれたみたいです。

そして船で沖の船に向かっているときに、私がいた時からいたクロという犬がおりました。あれは駅通の犬だとみんなが言って見たら、クロがそのはしけの後ろを泳いで追いかけてきたみたいです。声を出してクロって言ったらどこまでも来るので、両親も兄弟も我慢して、ただ無事に帰ってくれと祈っていたみたいです。みんな引き揚げたんですけど、ちょうど函館にシベリアの引き揚げがあったものですから、父がシベリアに連れて行かれて、そして帰ってきたんだと、白竜丸からの父からの元気で函館に着いたっていうのを見てそう思っていたんですけど、父が最初に進駐軍に調べられたときに、私が女学校にいるはずだけど、それが一番気になると言ったみたいで、進駐軍が学校まで来ました。

私たちは、学校に通うのも進駐軍の駐屯地の前を通らないように目と目を合わせないようにとか厳しく言われていたんですけど、進駐軍が2人学校に来てみんなびっくりしたようでした。でも私が元気で在籍しているということを確認して帰ったそうなんです。私も殺されるかもしれないと思いながら駐屯地に訪ねていきました。そしたら両親もおじい

さんおばあさん、兄弟もみんな元気で来たよ  
ということを知ってびっくりしました。嬉し  
くて、もう1人じゃないんだと思ったらあ  
んな嬉しいことはなかったです。何しろ引き揚  
げるときは1万7千人もいた人口が、もう1  
万人以上も亡くなってしまい、残された人も  
もう80歳以上になっているので心細い感じが  
します。

今まで、エリツインとかゴルバチョフとか  
ロシアからも大統領が日本を訪れ、日本から  
も小渕首相とか森首相、橋本首相などロシア  
を訪問して、その度に領土問題を出すんです  
けれど、一向に進展せず到现在に至っており  
ます。またメドヴェージェフ首相も北方領土  
に行き融資するからとか資力を出すとかいう  
ことで、だんだんまた返還が遠のいていきま  
す。

政府としましては予算とか、また今北方領  
土に住んでいる人との交流を考えて、ビザな  
し訪問とか自由訪問とか色々政府としても  
やってくれております。私も3歳で弟を亡く  
しているので、第1回の墓参には私の村の時  
に行ってきました。もう墓石などは一切ない  
んです。ロシアの方のお墓は十字架のような

簡単なお墓なので、日本のお墓が珍しいみた  
いで、パン焼き窯に使ったり、家の土台にし  
たりとか石碑はひとつも残っておりませんで  
した。だいたいこの辺りだということで、国  
で慰霊祭をしてもらいました。そして住んで  
いた村の方をちょっと回ってくれてお墓の前  
を通った時に、小さな茶色い犬がキャンキャン  
鳴いてバスの後を追いかけてきました。私  
1人なら幻かと思うんですけど、その時妹  
もいまして2人とも見ていますし、あれは弟  
の化身かなと、いっぺんも私の生まれた村は  
家がないので、そんなことは考えられないん  
ですけど、犬が追いかけてきました。弟も  
帰りたいのかなと思ってきました。

何しろ私たちの生き残っているものも、本  
当に80歳以上になって少ないので、私たち  
の力だけでは返還運動は大変なことなのです。  
これからは2世、3世の方にも力になって  
もらって、まず皆さんには関心を持ってくだ  
くこと。署名活動があったら必ず参加して  
ください。私も残り少ない人生ですけど、返  
還運動に携わって頑張っていきますので、皆  
さんもよろしく協力をしてください。これ  
でお話を終わります。





志発島元島民二世 神 林 美 砂 さん

おはようございます。只今ご紹介いただきました神林美砂と申します。今日、本当にたくさんの方にお集まりいただいて、普段も返還運動にご協力いただいているということでお礼を申し上げます。

今日秋田でこういうお話をする機会をいただいたということで、初めにちょっとだけ秋田と島のことを無理矢理結びつけたような話になりますが、関連する話から入りたいと思います。

秋田に来たのは、さっき会長さんにもお話ししたんですが初めてなんですけれども、田沢湖とか角館の桜、それと白神山地とか大曲だと花火が思い浮かぶんですけど、地図を見たらやっぱり周りにはいっぱい温泉もあって、私たちも色々ところの温泉行くと思うんですが、国後島と択捉島には火山がたくさん連なっていて温泉が昔からあるんですね。戦前国後島では硫黄が噴いているところで、昨日新幹線からも見たのですが、秋田も材木がたくさん取れますよね。材木を硫黄で燻して、船で運ぶので湿気防止に燻して、腐食を防止して加工して荷出していたそうです。

北方領土に温泉は今でもあるんですけど、ロシア人はそのまま暖かい川と冷たい川を石で調節して混ぜて、ただ掘っただけの温泉に入ったり、最近では施設を作って水着を着て彼らは温泉を楽しんでいます。エネルギーとしても、国後島と択捉島ではその地熱を利用して電力をまかなったり、暖房も地熱を利用した温水でまかっています。

秋田で言えば食べ物なんですけれども、お米とかきりたんぽとか、昨日もきりたんぽ3人で頂いたんですけれども。秋田に大きなフキがありますよね。以前、秋田出身の方に聞いたんですけれども、あのフキは秋田だけにあるらしいですよ。北海道とか島とかには同じものがあるんですね、元々。ちょっと定かではないんですが、北前船で誰かが持ってきて、秋田にだけ自生して今あるんじゃないかっていう話を聞いて、昨日も櫻井さんに「どうやって食べていたの」って言ったら、「梅で漬けて真っ赤に、美味しいのよ」って聞いて、秋田でもそのフキがあるらしいわよって昨日話していたんですけれども、そういうちょっと関連した話から入らせていただきました。

ここから本題に入ります。今山崎さんがご紹介したこの地図をなんとなく見ながらお話していきますので参考をお願いします。

私は根室で生まれて根室で育ちました。母はご紹介の通り歯舞群島の志発島、志発島の地図で55番の相泊っていうこういう尖った先のところが出身地です。子どもの頃は納沙布岬から見える島には、大きくて顔の真っ赤なロシア人、怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では小学校高学年になると、北方領土の授業があって、地理的なこととか歴史を勉強したり暮らしぶりを学んでいました。

返還運動に関わってから20年以上が経ちましたので、その間島に行ったり色々ところ

で運動している方々とお会いして見聞きしてきたことを、今日は皆様にお伝えしていきたいと思います。

初めに北方領土の概要について、先ほどの2人とあまりダブらないようにお話していきます。国後島は沖縄本島よりも少し大きくて、択捉島は沖縄の2倍ぐらい。面積で。2つで島の93%の面積を占めています。この2島は山々が連なっていて、たくさんの川が流れて雄大な自然の島です。

国後島に爺爺岳って四島で一番高い山、地図で言うと27番なんですけれど、爺爺と書いてチャチャダケと言うんですけれども、山があります。先程も火山の話をしましたけれども、私が6年生の時にこの山が大噴火して、根室にもすごい真っ黒な火山灰を降らせて、傘をさして学校に行きました。択捉島の太平洋側には、先ほどの櫻井さんのお話の単冠は16番ですね。櫻井さんさっき望遠鏡で見てたって言うていたんですけれども、反対側の隣町の具谷っていう18番の村があるんです。そこにいた人も、やっぱりランプ生活で、真っ暗だったので隣町が火事になったと思ったって。余りにも明るくて。というほど明るかったそうです。

択捉島の反対側、地図で言うと4番なんですけれども、ここはさっき櫻井さんがおっしゃっていたソ連が四島を占領するときが一番最初にあがっていたところ。留別っていう村ですね、4番があります。色丹島は、高い山がなくてなだらかな綺麗な緑の丘が続く島なんですね。アナマ湾39番なんですけれども、すごい深い入り江で嵐の時今も避難するのに良い港になっています。

母の出身の歯舞群島、他の島もそうなんですけれども、本当に山も無く、私たちせんべい島とか言っているんですが、本当真っ平らで山も無く木も少なくという島で、周りには岩礁とかもいっぱいあって、海鳥とかアザラシとか、そういう海獣類がたくさん生息しています。戦前1万7千人以上住んでいました

けれども、漁期には出稼ぎの人もたくさん来ていてすごく賑やかだったそうです。

当時は冷凍技術がありませんから、獲れた海藻と魚介類は塩蔵とか乾燥、缶詰も作っていました。昆布は皆さん今もお馴染みの良いもので、志発島では昆布と並んで帆立貝も凄くたくさん捕れていて、前に行ったとき拾ってきたんですけれども、貝殻がこんなに大きいんです。深いんです。だから貝柱がどれだけ大きかったかっていう感じで、子どもたちは学校の帰りに干してあるのを勝手にもらってポケットに詰めてくちやくちや食べながら学校の行き帰りをしていたそうです。

昭和の初めに、択捉島の紗那ではすごい豊漁が続いて景気が良くて、昼の下にお金を入れていたとか。あと三越で当時から通販で買い物をしていたとか。噴水のある家があったとか。テニスコートもあったという話です。

カニの缶詰とかに酸化防止の白い紙が入っていますが、あれは国後島の缶詰工場が一番先にやったと言われてます。歯舞群島と国後島は、主に根室の経済圏で、物資は根室から届いていたそうです。択捉島には函館からの船も入っていたので、さきほど櫻井さんが言っていた単冠湾は、あまり結氷もしなかったので1年中物資や郵便が途絶えなく来ていたそうです。豊かだったのは水産資源だけではなくて、北方同盟の小学生用の資料にもありますけれども、温泉の話もそうなんですけれども、わかりやすく言うと知床が何十もある感じで、山、川、森、高山植物、湖、湿原、そこに熊。櫻井さんの写真回っていますね。熊とか鯨、ラッコなどの生き物が今もたくさん生息しています。

今年の夏自由訪問で志発島に行って、夏休みで3世、4世の小学生、中学生も乗っていて、根室を出港してすぐイルカの群れがピョンピョン船の周りを飛び出したんです。最初騒いでいたんですけれども、どこに行ってもイルカが出てくるので、帰る頃にはイルカはもういいやっていうぐらいたくさんイルカは

出てきて、げんきな子どもたちだってみんなに言われていましたけれども、そのぐらい普通に見られるほどいます。

現在も、ロシア人が住んでいるところ以外は殆ど手つかずの自然で、最近ロシアの予算が付いて色々な開発とか整備がされていますけれども、やはり魚は儲かるので資源が乱獲されたりして環境面からも返還を急いでしなければということをおもっています。

私は、ビザなし交流が始まった年に初めて島に行く機会を得ました。子どもの時のイメージ、怖いロシア人がいるという、そういう感覚でいたんですけれども、とにかく行ってみようと思って参加しました。

初めて見た国後島は、古釜布っていう34番のところに行くんですけれども、ここは今も志発島に行くのに手続きをしに行くんです。あそこは外国ではありませんから入域、帰ってくるときは出域、区域に入るって言葉で今、入域手続きをする場所でもあります。初めて行った時の古釜布は、霧の中に沈んだ船がそのまま放置されていて、見える建物は潮風に晒されて古い錆色の汚い建物ばかりで、なんでロシア人はこんなところ返さないんだろうって最初に思いました。

択捉島と色丹島も同じような町並みで錆色でした。今は整備が進んでいて、黄色やら緑やらちょっとヨーロッパみたいな色のカラフルな街に変わりましたが、最初の印象はそんな感じでした。天気が良くなると緑がきれいで、素晴らしい自然が目飛び込んできて、ロシア人も明るくて子どもの頃からのイメージを捨てるのには、そんなに時間はかかりませんでした。

初めての訪問で、私は択捉島出身のおじいさんに会いました。運悪く択捉島のオホーツク海側で丸一日嵐で停泊したんですね。すごい揺れていて。そこはおじいさんの育った村の目の前だった。地図で言うと択捉島の2番内保ってところなの。下の方ですね。ここに丸一日いたんです。でも一日何もしく

ていい時間が出来たので、色々島の話をして聞いて、天候が回復して夜中に錨を上げる事になったんですけども、そのおじいさんが元漁師だったので、このそばに阿登佐岳って3番、すごい高い山があるんですけど、この上の雲が取れたら風向きが変わるから、そしたら出航だって船長さんにアドバイスをしておきました。

おじいさんは自分が育った村、その頃自由訪問がなくてまだ行けなかったんですね。墓参はやっていましたけれども。目の前だけど行けないってということで、夜中に真っ暗なデッキで般若心経を唱えたそうです。次の日おじいさんに、ねねこって言われて、俺もう来れないからあとは頼むぞ。まだ当時70代半ばで元気だったんですけど、胸がいっぱいになりました。おじいさんは鮭になっても帰りたいて言っていたんですが、そのあと故郷の村にも行けずに亡くなりました。

私はこれまで3回志発島に行きました。2007年と地震のあった11年、そして今年です。初めての時はこの地区に住んでいた人が、ここあんなのところよって教えてくれたり、本当に私は初めて会ったのに叔父や叔母の話を聞かされたりしました。さっきの帆立の貝殻をお見せしましたけれども、お茶碗のかけらとか、海に石炭が落ちているんです。海の中に鉋脈があって、削られて丸くなっていっぱい海岸に落ちていて、子どもの時も子どもがこれを拾って、家で煮炊きのお手伝いとしてやっていたそうです。

多楽島って隣の島があるんですけども、元島民が多楽石って呼んでいる石があって、メノウの一種らしいんですけども、これが波打ち際でピカッと光っているんですね。元島民の方に言われて、みんな下をジャブジャブジャブ見ながらこれだけを探して、何個か拾ってきました。

占領された1945年の9月は、母の家族はニセコって札幌の近くにあるんですけども、そっちの方に行っていて島には誰もいなかった

たんですけれども、祖父の船が島に沖止めしていたそうなんです。ソ連兵が島の反対側に行っている間に、女性と子どもたちだけでも根室に逃がそうということで集まるように村中で相談して決めたら、乗れないほどの人が集まって、さらに自分たちの持っている小舟を引いて根室に向かって夜出たそうです。

占領されて、根室では情報がなくて、何も分からない時に初めて大勢で逃げてきたので、役所の人やマスコミが港に船を迎えたそうです。初めて行った時に、その船に乗っていた一家の末の娘さんが私に言ったんですけれども、「私は島では生まれなかった。けど、あの船に乗らなかったら私は生まれていなかったかもしれないよ」って言われました。

2回目の訪問では、最初に行った時におじいさんの家があった場所を確認すると、1世の方のお話が聞ければと思って行ったんですけれども、近くに住むおばあちゃん兄弟が体調を崩してこれなくなったのと、地震があった年の5月に行ったんですね。そしたらあの辺もやっぱり津波が来たらしくて、砂浜が一変してしまして昆布が山のようにちぎれて高く壁のように砂浜に積もっていました。だからちゃんとした確認も今一できないで帰ってきて、私だけじゃなくて他の2世の人、やっぱり1世の人がいないとまだ自信がないということで、今度はみんなで一緒に確認しようと今年の訪問は自分のところだけじゃなくて他の人のところも一緒に確認しようと思ってきました。

今年は、頼りにしている例のおばあさん2人が元気に来てくれてたくさんお話を聞きました。さっき櫻井さんも言っていましたけれど、戦前住んでいた10歳の人もう80歳になるわけですから、1世の方の記憶も子どもの記憶で、それを聞いて私たちが引き継いでいかなければいけないということで、本当にこれからはどんどん1世の方も出てこれなくなるから、本当に大変になるねって話を2世でしていました。

今回は、前回の昆布の山もなくなって、だけど砂浜は侵食されてどんどん少なくなって行って歩きにくくなっていました。船の中でも、ほう引きっていう島の人たちが遊ぶ、くじ引きみたいなロープがいっぱい付けて当たりがあって、それをやるのをおばあさんにやってもらったり、たくさん色んなことを今回の自由訪問では一応引き継いだような気持ちでいますけれども、やっぱり1世の方が段々少なくなっていくっていうのは、本当に私たちはまだまだ弱いなと思って実感しました。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯しているだけで、家も住んでいる人もいません。国境警備隊に言わせればなんで毎年来ないんだと言うんですけれども、来させないのは自分たちだろと思いつつ、そうですかと。ビザなし交流に参加した時もそうなんですけれども、元島民の方は本当に私たちの見えない景色を見ているのが分かって、さっきの櫻井さんの話でも本当に想いが伝わってくるんですね。私たちは出来る限り話を聞いて、想いを継いでいかなければいけないと思っています。

皆さんもそうだと思うんですけれども、故郷っていうのは年を取れば取るほど懐かしくて、自分のことを振り返ったり懐かしんだりするときには浮かんでくるものなので、自分たちの意思ではなくて自由に行けないとなれば、本当に尚更だと思います。

四島からの引き揚げ方は色々です。さっきの櫻井さんの一家は樺太を回って来たって言いましたけれども、歯舞群島というか、国後島の南側の方々は逃げてきたんですね、自分の小舟で。夜とか嵐で。亡くなった人がいたり、女性は乱暴されるということで髪の毛を切って顔を黒く塗ったり、船に乗るときは襟に毒を入れて、乱暴されそうになったらそれを食べなさいと親に言われて乗ったそうです。

送り込まれてきたソ連人と一緒に住んでいて櫻井さん一家のように帰ってきた人。国後

で3か月掛かって帰ってきたっていう人がいるんですね。そこのお母さんが、うちの子どもたちが小柄なのは、栄養状態が悪いし帰ってきてからもなかなか定住地が決まらなくて転々として大変だったので小さいのよっていう人もいます。

去年櫻井さんに初めて会って、1人で函館で待っていたっていう話も聞いて、本当に大変だったと思います。11年の地震のあとに、岩手に住んでいる国後島出身の方にお見舞いの葉書を書いたんです。その人は内陸に住んでいるのでそんなに被害に遭わなかったんですけども、後でお手紙を頂いたのでその一節を紹介すると、「特に福島原発周辺の被災者の避難所生活を思うとき、住み慣れた国後島を追われ、樺太の真岡の収容所で家族8人と共に過ごした日々を思い出します」というお手紙を頂いたんですね。やっぱり自分の意志じゃなく故郷を離れて、先がどうなるかわからないという引き揚げの時の自分たちとダブったんでしょう。

他の方もよくおっしゃっています。島を返せ返せと日本人は言うけれど、今更この便利とは言えない島に日本人は住むのかとロシア人は聞くんです。そういう理屈じゃないんだ。故郷だから帰りたい。だから返せって言っているんだ、ということを私たちは言っています。私たち2世や3世は後継者と言われていきます。文字では後を継ぐ者と書きますけれども、元島民の後継者として何を継ぐのか？と考えます。69年進展のないことの後を継ぐ。とても重いものです。

北方領土は4つの島で「北方領土」であるということ、今日お話をさせていただいた「島への想い」をしっかりと継ぎ返還運動をしていくこと、それが後継者の役目です。それぞれの元島民が抱えている「島への想い」を聞き伝え感じ、一日も早い解決を目指し力にして行きたいと考えています。

本日は本当にありがとうございました。



## 【岡山県会場】

- 開催日時 平成26年11月27日(木)
- 開催場所 岡山県岡山市
- 開催団体 岡山県婦人協議会
- 参加者 300名

### 元島民の訴え



志発島元島民 児玉泰子さん

皆さんこんにちは。実は私昨年10月に岡山を訪れまして。北方四島に今住んでいるロシア人と日本政府は、ビザなし交流ってやっているんです。その受け入れが去年岡山県だったんです。

先程、金田さんがお話ししていましたが倉敷を見て頂き、日本の文化というものの素晴らしさを堪能して、日本はなんて良い国なんだろうということを感じて、こういう方々と領土問題があるということは、自分達は住んでいるけれど、これを少しでも理解していこうと岡山に来て感じて帰って来ました。

ただ彼ら、彼女たちが解決できる問題ではなく、やはり政府がしっかりとした交渉をしないと領土問題っていうのは解決しないんじゃないかと思っています。その領土問題の解決を支えるのが皆さんの力でございます。今日は、私北方領土で生まれた1人としてお話させていただきます。

実は私が生まれたのは、納沙布岬から23キロにあります歯舞群島という島の志発島という所で生まれました。ここでは皆さんなじみ

の昆布がたくさん獲れます。昆布が獲れますので、皆さんがよく昆布を売って召しあがっています。あれが歯舞昆布って書いてますでしょ。ちょうどその昆布が私の所の生まれた所であります。

私の家も昆布漁をしまして、先祖は岩手県から江戸時代にこの島に入りまして、四代に亘って昆布漁をしていました。本当に平和で、開拓してしっかりと子どもたちに繋いでいこうとして昆布漁をしたのですが、残念ながら1945年の9月に私の島にロシア人が入って来て、そして占領されて着のみ着のまままで本土に送られました。

当時私は3歳でした。3歳ですからほとんど記憶にはありません。ただ、私の家族、特に島で思いが強かったのは祖母でして、ずっと島に帰りたい帰りたいと言って島の話をしてくれました。母から、兄弟から、周りの人から色々な話を聞きました。私は島に住んでいたような気持ちになるくらい、自分が体験したんじゃないかというくらい島のことを話せるようになったんです。

今日これから話させていただきますのは、

帰りたい帰りたいと言っていた家族のこと、それをしっかり受け止めて、そして北方領土の概要、それからソ連軍の上陸と占領。そして望郷の念。島を私が訪れた時のことなどを、少し話したいと思っています。

先ほどから話がありましたが、北方領土というのは4つの島がありますが、その中で7つに分かれていたんです、村が。そしてここに17,291名の人のがのどかに暮らしておりました。島はどこも水が豊かなものですから、川がたくさんあるんですね。川というのは植物プランクトンを運びます。流水が来ます、オホーツク海から。これも植物プランクトンを運んできます。ですから良い昆布が育ち、その昆布が育つと、その昆布の森の中にウニとか、皆さんウニも大好きだと思いますし、そういう甲殻類が育つ訳です。そうするとそれを大好きなのがラッコが来ます。ちょっと想像してみてください。水族館でしか見られませんけれど、カニとかウニを凄く食べるんですよ。こういうものが生息しております。皆さん恐らく北方領土っていうのは、本当は寒くてどうしようもない島だと思いでしょ。うけれど、そういう島です。

歯舞っていう名前の島はないんです。歯舞、色丹、国後、択捉と言いますが、根室から16キロの所に歯舞群島というのがありました。この村の一部が歯舞群島までだったんです。群島ですから色々な島の名前があります。小笠原も小笠原って言いますが小笠原島っていうのはありませんでしょ。それと同じように理解してください。

色丹はとっても緑が綺麗です。ここでしか見られないような高山植物がたくさんあります。それから国後島はちょっと想像してください。今お手元に地図があるでしょうけれど、沖縄と国後島を比べた時同じぐらいだと思っている方ちょっと手を挙げてください。じゃあ、国後の方が小さいと思う方。実は国後の方が沖縄本島より少し大きいんです。北海道が非常に大きいのでどうも誤解します。日本

列島って長いから、この離島がきちんと地図に入らないものですから。ですから、知る機会が余りないでしょうけれど、国後は少し大きいんです。その2倍の大きさが択捉島になります。

国後島は、実は皆さん大好きなカニがたくさん獲れました。世界の中で、一番先にカニ缶詰を生産したのが国後島なんです。戦前はここでカニ缶詰を作って、そして横浜から海外に送られていました。カニ缶詰って簡単に言うけれど、作った人は大変苦勞しました。カニ缶詰を開けて中に何入っているか分かりますか。カニの身は当然入っていますよね。他に絶対食べられないものが入っているんです。紙です。白い。何故入っているかと言うと、カニというのは独特の酸があるんです。だから缶詰めの中にカニだけ入れて缶詰を作ってしまふと腐食します。それで試行錯誤して、試行錯誤して国後島の人が、そしてあの紙を入れて缶詰を作った。ですから色んな意味で、北方領土っていうのは生活の知恵が生まれていたところなんです。

それから、択捉島はですねこれはまた違いました、大きいんですが、獲れていたものは鮭、マスです。特にこのあたりの鮭っていうのは、凄く良いのが獲れます。皆さん、鮭は甘い食べるようになりましたけれど、これは冷凍技術が発達したからなんです。昔はしょっぱかったんじゃないですか。塩辛い鮭ばかりでしたね。これは塩蔵というんです。塩蔵というのは、むしろの上に鮭を敷き塩をし鮭を敷き、これを山漬けと言います、専門用語では。これまたひっくり返す。そうすると水分が抜けます。ビシッとなっていくわけです。冷凍技術の無い時代、それで本土に送られる訳ですね。このときですね、あまりにも獲れて、昭和4年には択捉島の川に鮭が上り過ぎて、水より鮭の量が多くなったって。

よくある嘘のような話なんです、そのくらい獲れたので、その塩が根室とか北海道か

ら運ぶにも追いつかなくて、実は戦前アフリカのソマリランドというところから直接この島に塩を送るくらい、そのくらい鮭が獲れたんです。今も鮭が獲れています、たくさん。これが大体分かりやすくご婦人に四島というのは、何か政治的なにおいがして、寒くてどうしようもないんだろうと思っているでしょうけれど、分かりやすくお話ししました。

国後と択捉というのは温泉が湧き出ます。とても良い温泉が湧き出ます。今はロシア人も温泉に入っております。特に色丹島の高山植物は素晴らしい高山植物があって、戦前からたくさんの植物学者が入りました。このあたりの高山植物は、いま北海道で絶滅危惧種と言われているものがあります。私も2年前に色丹島の高山植物の一番いい所に行きましたけれど、本当に綺麗です。東洋の箱庭と言われたのにぴったりの島です。

どうもですね、領土問題というのは政治的なことばかり言われて、皆さんに北方領土の姿というものを知らせないで来たのではないかと思うんですね。これが敬遠されてきた。それから、冷戦時代に東西の国際社会の中で、どうもソビエトを反敵視するところもあって、そういうところの中では正確に伝えなかったというものが、運動の停滞にもつながったかなと思います。

先程からお話がありました、北方領土にロシア人が入ってきた。その前に実は、さきほど金田さんが言いました8月15日が終戦。その時には、北方領土から先がある18島にもロシア人は一人も来ていなかったんです。カムチャッカ半島の下に来たって言えば変ですけど、隣に占守島というところがあります。ここにロシア兵が上がってきたのが8月18日の早朝なんです。ここで実際に戦いをしています。

ところが日本は、戦争は終えたんだから武装解除と言われてずっと南下してきたわけです。ウルップ島まで。これは択捉島の北にあるんですけど、ここからソビエト兵は引き

揚げています。その時の言葉は「ここから今はアメリカ領土になるんだ」と言ったそうです。ところがですね、何日か経ってから別の部隊がまだアメリカが根室までしか来ていないということがわかったので、サハリンから樺太ですね昔の、そこから択捉へ向かって別の部隊が出てきたわけです。そうして8月28日に択捉島の留別というところにいきなり上陸してきました。早朝で、当時島はものすごい濃霧でした。10時頃霧がスーッと晴れたら、目の前にいたのはロシア兵が銃を構えていたって。ここから占領が始まったわけです。

後で聞いていて判ったんですけど、情報の収集をきちんと整理する国だなと。恐ろしいほど情報収集されたなと思います。その留別というところは、択捉島にいくつもある村で、ここの郵便局が電話局になっていたんです。そこに、島内の電話交換の中継地があって、そこから海底ケーブルを通して根室に連絡ができる重要な村だったんですよ。まずそこを押さえました。そして真ん中に川が流れているその橋も押さえました。そうすると人が行き来できないんですよ。島内を。ちょうど島の真ん中の一番のポイントを一番に押さえました。それから学校、警察、色んなところに銃を持ったロシア人が押さえました。その時に、郵便局も押さえられたので本土に連絡ができなくなっちゃいました。

当時郵便局の局長さんが、どうしても島が占領されたことを本土に連絡しなければいけないと。これは自分の職務として大事なことだということで、色々考えた時に二十数キロ離れた紗那という町にも無線塔があったんです。この無線塔が何故あったかと言いますと、先ほど話しました鮭がたくさん取れたのが昭和4年なんです。その時に北海道から村に魚を獲っていい量を多く与えられたんです。そうしましたとき、その紗那の人たちが集まって、来年から島が豊かになる。だったらどうしようかということ相談したわけです。そしたら郵便局が小さいから郵便局をもっと立

派にしよう。紗那の。それから孵化場を作ろう。それから無線塔も作っちゃおう。なぜ無線塔を作ったかという、海底ケーブルが冬になると流水で雑音がたくさん入るわけです。そうするとなかなか繋がりにくいから、無線で根室の無線と直接できるようになるともっと島は楽になると。島民にとっても良いことだから、これらを作ろうということになって、島民がお金を集めてこれらを作っちゃったんです。

当時ってすごいなと思うんですが、郵便局に当時の通信省にこの無線塔と郵便局を寄付しちゃったんです。無線の連絡を本土と1日に3回やっていました。そう、この無線を使おうと思ったわけです。ところが銃を構えているわけですね。局長さんは目配せして、一人で行くと。もしかして撃たれたりなんかしたら連絡が途絶えるかもしれない。だったらばということで、自分の信頼している部下に合図をして、裏の方から出ると。あとは違う人にちょっと不穏な動きをしろと。動けと。そうすると、ソビエト兵がそちらに気を取られるわけですね。その間に二人で裏口から出て、それで馬に乗って紗那に向かった。

その時に、川は掛かっている橋を渡れないので、川上へずっと行って川を越えて、それでそちらにある馬の放牧地に向かった。放牧地に向かったら、島は当時駅通というのがあって、島内の足は馬だったんです。駅通が至る所にあつて、島民と人馬一体ですから、島民がこの駅通からここまで一つの馬に乗りますね。ここにもまた馬がいるんです。乗り換えます。これは馬が大事だから疲れないように。そしてまた乗り換えていくんです。このように馬は本当に大切にされていました。

ちょうど駅通だったので、そこで馬に乗ろうとしたら、一頭の馬が大きな声で鳴いたそうです。なぜ鳴いたかっていうのも不幸な事で、この馬こどもの時に親を亡くしちゃったそうです。その郵便局の局長さんが小さい時から可愛がって育てたから、馬がその人をお

父さんかお母さんのように思っていたわけです。あ、来たと思って喜んで鳴いたそうです。その声がソビエト兵に聞こえて、それで銃を撃たれました。でも二人はすごい馬に慣れていましたからぼんと跨って、それで後ろから撃たれたけれど、その中で勇敢にも次の駅通まで行って、そこから臨時の電話で紗那の郵便局に行き実は留別が占領された。今から行くから無線を根室に打って欲しい。だから無線技士にそのままいて欲しいと。こうして紗那まで行って、そこから無線を打ってようやく根室に無線が届いたのが日が暮れて8時過ぎていました。当時は、8月末は日が暮れるのが早いです。でも、その郵便局長さんともう1人の人は、紗那の人たちが帰るなど。そんな危ないところに帰ることはない、このままいれと言ったけれど、自分達二人が馬で行ったということを見ているから、帰らなければ島民に迷惑をかける。そんなわけにはいかないと。夜10時過ぎにトボトボと熊がたくさん出る明かりのない道を帰っていったと。そして4時過ぎに家族の元へ行って、また川を抜けて。家族は、行くときにもう最後の別れだと思ったそうですが、無事に帰ってきたと。これによって北方領土が占領されたということが、日本の政府が分かったわけです。

そして続いて国後に侵攻し、それから色丹にも行って、私の生まれた北方領土の歯舞群島というのは9月になってから入ってきました。9月5日までに全部占領されて、翌年にはソビエトのサハリン州の一部に占領されていました。はじめは兵隊だけが来たんです。それから一般の人が送られてきました。

一般人が送られてきたのは、大陸から送られてきたんです。それもですね、こんなずた袋にフライパンと僅かな荷物しか持たないで送られてきました、あの島に。住む家も整備されないままに一般人が送られてきました。だから日本人の家とか学校とか警察とか、全部半分は仕切って生活しました。

ただ、みなさん考えてください。会ったこともない、言葉も通じない人がいきなり入ってきたんですよ。しかも、もう島から抜け出すことも、それから本土への連絡も途絶えたわけです。この来た人たちが、実はウクライナの方が多かったんです。皆さん、以前ウクライナというピンと来なかったんですけど、この頃ウクライナっていうのが良く知ってますね。なぜウクライナの人が来たかというと、ウクライナは当時ドイツとの戦争で焼け野原になっていたんです。もう住む家もない。そうした人たちをここに送ってよこしたわけです。

ウクライナの方々は大陸ですから、魚をさばいたこともない、漁も出来ないんです。それで、私の母もみんなそうですけれど、家族は仕方ないからこの方たちに魚の捌き方を教える。向こうは向こうで、子どもが生まれたって言うとな日本の産婆さんが取り上げてあげる。そして産着を貸してあげたり、普通に協力しなければ食料も何もソビエトから配給されたものだけになっちゃったわけですから、そうして生活をするようになってしまいました。

たくさんトラブルもあったそうです。特に私の家のを聞いてみますと、9月2日に私の家に来て、対岸で見えていますと大きな船が現れたそうです。その時も家の島はおそらくアメリカ人が入ってくると思っていたんです。そうしたらソビエト兵だった。平和に暮らしてたのが、いきなりソビエト兵が銃を持って土足で家に上がってくるわけです。文化風習の違いってやっぱり本当に怖いと思うんですね。私たちは普通に靴を脱ぎます。ところがロシア人は、普通の生活でも当時靴を脱ぐという文化がなかったわけです。銃を突きつけて言葉もわからないソビエト兵が、いきなり銃を持って土足で家に上がってくるわけです。みんな本当に怖かったそうです。

うちの島に上がって来てまずしたのが、大きな建物から占領しました。お寺にも行きま

した。お寺は、そこの島によっては戦前54の墓地があったんですが、うちの島の私たちが住んでいるところは、墓地を作らずにお寺の骨堂というところにお骨を納める。そのお骨の箱がとても綺麗なものですから、何が入っているのか、良いものが入っていると思ったんです。これを全部ひっくり返されて、そして時計などもたくさんつけて、ネジを巻くのがわからないから、止まると捨て。母は怖くて屋根裏部屋に隠れたそうです。ちょうど私が1歳でしたので、乳飲み子を抱えて。

年頃のお嬢さんとかを持っている人は、ともかく乱暴されたらいけないということで、今こんな髪をしても不思議はないんですけど、当時こんな髪をしている日本の18歳のお嬢さんなんていなかったんです。16歳とか。みんな泣く泣く、親が裁ちバサミでジョキジョキと髪を切ったそうです。そうして顔にススを塗って、ここにぎっちりサラシを巻いて、そしてあぐらをかき。男物の服を着て。ともかく女であるということを隠そう、乱暴されないように、ということをしたそうです。まず上がってきて調べたのは、軍人を匿っていないかということでした。そしてこの家には何人いるんだということ。うちは私と母は屋根裏に隠したから、私と母はいないことになっていたわけです。

大体占領が全部終わってしまってから、ソビエト兵が島を巡回する日にちっていうのがきちんと決まる。パターンが。パターンが分かかってきたから、母は毎日隠れているわけにいかないから、あるとき私を抱いて、今日は来ない日だからということで下に降りていて普通に生活していた。そしたらいきなりソビエトの将校が上がってきた。家族は本当に凍りついたそうです。そりゃそうですよね、騙っていたわけですから。どうしようと思ってみんな固まったら、そのソビエトの将校がじっと見て、何も言わずにただ両手をこう出したそうです。何を言っているか言葉が判らず、家族は本当にどうしよう。母はその時に

すごい信じられないことをしたそうです。私をロシア兵に渡したそうです。私後で聞いて、そのことを聞いたとき、あんたらってなんて親なのって言いました。

だって普通は、親ってというのは抱えて離さないのが親ですよ。それを自然な形でぼんと渡したそうです。それは、その時の将校がとて怖くなく、抱かせてくれていう風にしたそうなんです。だから言葉は通じないけれど心は分かったみたいなんです。こうして抱かせたら本当に上手にあやしたそうです。その時に母は、ソビエト兵でも親なんだなということが分かったそうです。我が家にとっては、私は中和剤になっちゃったそうです、ロシア人との間で。巡回する度に、うちは父が昆布漁をやっていましたけれど、馬の飼育がすごく上手だったので、日本の軍から軍馬を預かっていました。軍馬を預かっていたのでうちは良い馬がたくさんいました。だから島を巡回する人は、うちへ来て馬を乗り換えて巡回するわけです。兵隊さんが。その時に、来ては家へ来て、私「たえこ」なんですけれど、ロシア人ってというのはあとかが曖昧なんです。「たいか」っていうと私は自分が呼ばれていると思って、なんともなくその隊長さんの所に行って、そしたら隊長さんが目の前に乗せて島を巡回して歩いたと。だから、嫌なこともたくさんあったけれど、人間的には仲良くなれば色々なことが良い人よっていうのは聞いていました。

でも、夜になって遊びに来た家族がなんか賑やかだなと思うと、鶏小屋でギャーギャーするので見ると懐に鶏を。見つかってごめんなさいっていうような顔をしてニヤニヤして置いていく。文化とかモラルが違うっていうのは、本当に色々なことを我慢して越えなければ、そこでケンカしちゃってもしょうがない。ともかくケンカをなるべくしないでどこかで折り合いをつけて生きていかなければいけなかったと。本当に悔しい思いはたくさんあったと思います。ほかの人に聞くと、親が

買ってくれた帯を、これが良いからよこせって言われた人がいて、それを渡したら次の日にはカーテンになっていたとかね。

それからすごくおかしな話は、留別でソビエト軍が軍の基地を作ったわけですね。この時にあるお母さんが赤い腰巻を干していた。洗濯して。そしたら腰巻を夕方取り入れようと思ったらなかったそうです。どこにいったのかな腰巻と思ったら、次の日ロシア人がこうやって旗の代わりに上げていたって言うんですね。そして敬礼していたと。要するにソビエトの赤い旗がなかったから、代わりにちょうどいいと思ったんでしょうね。みんなはあそこのばあさんの腰巻上がったぞって。今日も敬礼してるぞ、あいつら。わからないんだな、ばあさんの腰巻っていうくらい、やっぱり文化風習が違うといろんなことがあったそうです。笑い話になるような話もたくさんあったし、辛い話もたくさんありました。その中で2年から3年暮らしました。

実はですね、私の祖父が島に開拓に行った時に、皆さん昆布漁っていうのは大変だっていうのをちょっと知っていただきたいのですが、岩手から南部藩です。江戸時代にあの島に行った時、スコップなんて当然ないですよ。そして行って昆布干すのに、まず干場を作らなければいけないんです。その干場がしっかりした干場を作らないと、良い昆布は作れません。ですから、まず土をしっかり固めます。そして少し傾斜を付けるんです。そこに溝を作ります。これをしっかり固めるんです。その上に石と砂をのせます。もう一度土を少し入れます。そうすると、なぜだと思いませんか。雨が降ると早く水が流れます、溝から。だから干場が早く乾くんです。そうすると良い昆布が干せます。だから本当に苦労して干場を作ったんだと思います。

先ほどの話に戻りますと、いよいよこのままいるんだと思っていたそうです。大体慣れたと。旗もわかってきた。害も与えない。協力しないと生きていけない。そう思っている

うちに、本土送還の命令が下されました。私たちの家族は11人おりました。11人いまして、親は本当は島を離れたくなかったんです。どの人もそうだったと思います。でもどうしても離れたかといいますと、もし留まるとソビエトの国籍に入らなければいけないんです。だから苦肉の判断でした。私たちを、子どもたちを日本人として生かしていきたい。だったらやむを得ずここは命令に従うしかないだろうと。

ただ、一時的に送還だと思ったんです。だから大事なものは軒下に穴を掘って埋めてきました。必ず帰ってくると思って。わずかに風呂敷1つぐらいの荷物を抱えて、引き揚げ船に乗せられたんです。本当に辛かったと思います。悔しかっただろうしね。親から預かった島であるし、それから自分たちが色んなことを、思いをしてきた。そして集まれって言われたところに11人がしっかり手を握り合いながら、本当に言葉もなくトボトボと向かっていった。

その沖合に大きな貨物船がありました。ソビエトの船です。そこに行くのに浜辺から小舟に乗せられました。引き揚げの時、体験で色々な話を聞いていますが、これが一番恐ろしかったって言っています。この時、小舟に乗せられて沖合に行きました。沖合から大きな船を見上げるとこれより高いんですね。どうやって私たちはそこへ乗せられたと思います。モッコに入れられたんです、荷物に。それをガーッと突き上げられて、それでいきました。その船も貨物船ですから、船倉に入られてトイレもなく色んなことがあって、海が時化れば頭からいろんな汚物を含めた海水が入ってきました。そして樺太に送られました。

樺太では「まんま食べたい、まんま食べたい」ご飯ですよ。たくさんの方がなくなりました。そして函館に送られたんです。函館に送られて、親戚も多いし島も近いから必ず帰れると思って、ほとんどの人が根室に行っ

たわけです。ところが未だに北方領土に戻ることはできません。私の祖母はそれから必ず帰るんだって言って色んなことを教えてくれました。必ず帰るんだぞって、あそこで全員で暮らすんだぞって言っていましたけれど、そのうちに私の父が事故で亡くなりました。祖母にしては一番自慢な長男を失ったから本当に島も失い、本当にすごくガッカリしていたみたいです。

戦後20年経ったあるときに、必ず帰るんだって言っていた祖母は、島に向かう海に入って歩き出したんです。もう恐らく彼女の心は、ボロボロになっていたのではないかと思います。そして家族が見つけて引きあげました。その時は生きていました。こんな事しちゃいけないんだよって言いましたが、とうとうその冬、川に身を投げて亡くなりました。私は本当に辛かったんだなっていうのを感じました。

後で分かったんですが、祖母の思っているのが一番強かったのは、ある年に志発島の海明けが遅くて、村人が何人かで船を出して根室に食料を買いに行きました。その3人の中に私の曾祖父、祖母の父親が乗っていたんです。そして根室で米を買って、食料を買って帰るとき、丘の上でああ帰ってきたねって家族とか島民みんなで待ち構えていたとき、目の前で横波を受けて死んでしまいました。だから、本当に祖母は島への思いは強かったんだと思います。それで月命日になると丘の上から手を合わせた。この手を合わせられないということが本当に悔しかったみたいです。そういう意味で亡くなりました。

私が初めて北方墓参と訪問で家に行った時に、草がこんなに生い茂っているんです。そこをずっと行って、私の頭で案内してきました、家まで。ここに私は住んでいたんだな、ここで生まれたんだな。11人の家族はここで暮らしたんだなと思いました。ずっと歩いて行ったら、祖父が買っていたものが出てきました。それからさらに歩いて行ったら、土が

硬いんですね。もしかしたらと思ったら、やっぱりそこが先祖が作った干場でした。どんなに大切に思ってこの干場を作ったのかっていうのが良くわかりました。

そうして、ああ、おばあさんが来たかっただろうな、家族全員で来たかっただろうなと思って、帰りに海に向かって帰りに手を合わせました。波の音が聞こえて、石がコロコロコロコロと流れました。これが私の家族たちの故郷の音です。

その後行った時には小さな帆立貝、こんな大きいんですが、これが小さくなってキラキラ光っていました。これはまさに私たちの70年の、長い長い歴史じゃないかと思いました。私はそこで、故郷の小さな石と帆立貝がこんなに小さくなっちゃったんです。丸くなって。これがたくさんあります。これがまさに私たちの人生を物語っているように思いました。

今、北方領土問題って色々取りざたされますが、私たち一人一人が色んな思いをして暮らしてきました。来年は戦後70年です。多くの方が亡くなって、今では平均年齢がまもなく80歳になろうとしています。残された時間は本当に少ないです。誰の責任でもないと思います。先ほど金田さんがおっしゃっていましたが、色んな歴史があります。ただ、私たち日本人がこの領土を返して欲しい、この問題を解決しなければいけない。日露の間では、素晴らしい関係を作っていかなければいけない。これが私たち次の世代に課せられたものであるということを、声を大にして言わない限り領土問題は解決しません。

特に、返還運動というのは、男性に任せても物事は動かないと思います。私が通っている団体に北方領土返還運動連絡協議会というのがあります。これは日本の中で、一番最初にできた民間団体です。任意団体です。これを作っているのは私の恩師なんですが、その時の初代の会長が、実は山高しげりさんという皆さんの大先輩です。山高さんは、やっぱり女性がやらないといけないと思ったんで

す。今、地婦連さんの中とか婦人会の中で山高しげりさんて名前を聞いてもわからない方もいらっしゃるんですけど、全地婦連の初代の会長さんです。

地婦連さんが出来たのは、ビキニのマグロ事件の時に家族、家庭がしっかりとした食事を食べられるためにということで出来上がった団体だということを聞いています。大きな運動をしてきています。色々やっています。私もその中で一緒に活動させていただきますが、皆さんが温泉が湧き出て、それから花が綺麗で、海にいるラッコの話とかしましたけれど、シャチもいます。色んなものがあります。そういうところに自分が自分の足で立つんだと思って運動してください。

北方領土は元島民の島ではないんです。私たちは島に帰りただけです。日本の領土として返還されて初めて皆さんの領土なんです。どうか色々おありでしょうけれど、署名活動とか地方の集会とか、大会に出てちょっとでもいいから北方領土っていうのをお話をさせていただきたい。難しいことを話さなくてもいいんです。もう元島民も命が短いですよ、それから日本の領土ですよ。ロシア人に対しても、領土問題っていうのをしっかり言っていかなければなりません。

その時に、優しく物事を言い合いながら解決していかない限り、ただ首を絞めても領土は返らないと思います。家庭の中から知恵を出し、そしてお友達とか色んな人と話し合っ、皆さん一緒に温泉に入りに行きましょう。長生きしてください。私も頑張ります。ありがとうございます。





国後島元島民二世 金田 慎吾さん

皆さんおはようございます。ご紹介頂いた金田です。最近自然災害が非常に増えていると思いませんか。今日も阿蘇山が噴火したとかっていうニュースも出ていました。御嶽山の噴火。それからお隣の広島県だと土砂災害。最近の台風はかなり強烈な台風が来るようになっていきます。北海道でも獲れない魚が獲れるようになって来ていて、この間の長野の大地震もそうなんですけれども、非常に自然災害が増えて来ているような印象があります。ただ、中でも東日本大震災は、非常に映像を見た時にすごく凄惨な映像だったなという事で焼きついているんですけども、さらに福島原発ですね。あの問題で、やっぱり放射能ですから自分の家に帰れない人がまだまだたくさんいらっしゃる。

自分の故郷に戻れないっていうのは非常に辛いことですね。ちょっと想像してみてください。この皆さんが住んでいる岡山県にもう住めなくなる。どこかに出て行ってくださいと言われてた時のことをちょっと想像してみてください。自分の家も、お墓も仕事も何もかも捨てて、どこかよその地域へ行ってくださいって言われたらどうでしょうか。今のきっと福島県の、震災を受けた人もそういう状況なんだと思います。

実は、第二次世界大戦から故郷を失ってふるさとに帰ることが出来ない人達があります。それが今日お話をさせていただく北方領土の問題です。北方領土っていうのは皆さんご承知の通り、北海道の人誰も住んでいません。住

むことが許されていません。そういうことっていうのは、例えば沖縄もそうでした。ただ、沖縄はそこに住むことを許されたんですね、住人は。アメリカの統治下に入りましたけれど、住むことは許された。でも北方領土の人達は住むことを許されない。もう70年近く経ちます、終戦から。非常に辛い思いをされて来たという所でございます。特に、今であればちゃんと住宅が出来たりしたんですけども、当時終戦直後でしたから、親戚を頼って行っても大変だったと思うんですよ。その中で迷惑もかけられないという事で、北方領土の人達は非常に苦勞してきたということでございます。

当時20歳だった人でも90近くになる訳ですから、本当に早く返還していただきたいというのが、元島民の方達の思いでございます。生活の基盤を根こそぎ奪われたんですからね。やはり誰でも返してくださいという話をするんだろうなということがあります。この間沖縄で知事選がありました。やはり、基地に反対する知事さんが当選されたということです。本当に沖縄の人達も基地の問題などで大変辛い思いをされていたということが、選挙結果で判るのかなと思っています。

やはり戦争というのは、人の人生を狂わす問題だと思います。非常にそれによって人生が大きく変わったという事がございますが、実は私の母は国後島出身で根室に引き揚げてきた訳ですけども、そこで私の父と知り合って私が生まれたという事なので、人生が

狂って生まれてきた私なので、あまりこの問題で返せって言うのはどうなのかっていうことはありますけれども、正すものは正していかなければならないのではないかなと思っております。

8年前、私はロシアの首都モスクワに行って参りました。モスクワではいくつかの公的な機関を訪問しまして、意見交換をして参りました。その中で、ロシアの方の意見としては、北方四島、北方領土については、戦争の結果による国境線の形成だという言い方をしました。つまり、戦争で奪ったから正当なものなんだという主張でした。それって本当に今までそうでしたよね。戦争で奪い取って領土を形成して、これはうちの領土だと。それは本当に、国際的に正当な理由として良いのだからかというふうに私は思うんですね。暴力で人の領土を奪い取ったことが、正当な理由としてロシア側は言うんです。でもそれはもう昔の話。これからはそんな理由通らないぞという事を、日本の政府は言うべきではないのかなと思っています。

日本の固有の領土ですから、今まで第二次大戦以前は一度も他の国に占有されたことがないと日本は主張しております。私は第二次世界大戦では、ロシア、当時ソ連ですけども、ソ連とは直接戦っていなかったっていうことを言うと、お互いに敵対するグループ同士に所属していたという形で反論します。ソ連が北方領土に来たのは8月の末なんですね。皆さん終戦の日ってご存知ですか。8月15日ですよ。でもロシアは、ミズーリ号で調印した日。9月2日でしたか。日本が降伏文書に調印した9月2日が終戦の日だと言います。私ちょっとびっくりしたんですね。自分の中では8月15日の終戦というのは世界的に共通の終戦の日だと思っていましたけれども、認識がそこまで違うんです。確かに正式な調印をした日を終戦と捉える見方は、それはそれで間違いではないのかもしれませんが、日本の中だけにいると分からないことが

見えてきたなど、この訪問で思いました。

ロシアは、一度得た領土を引き渡すということは、ロシア国民の理解を得ることが難しいという事で、それは屈辱的な外交であるという話もされました。北方領土の解決を図るのであれば、政治的なアプローチは本当に必要であるなという印象を受けたものでした。

日本と旧ソ連は、1956年に日ソ共同宣言というものを発表しております。この中でロシアは、当時のソ連の継承国としてこの日ソ共同宣言を尊重するという話をされておりますが、日ソ共同宣言の中身は平和条約を締結後、歯舞群島、色丹島の二島を日本に返還するという内容のものです。その他にも色々あったんですけども。ということは、平和条約を締結したら二島を戻してくれるんだという話になるんですけど、そこで全部解決してしまうということになります。

つまり、国後島、択捉島、この二島は戻ってこないという形になってしまうので、日本政府は平和条約の締結に踏み切っていない。8年前の10月19日なんですが、モスクワの市庁舎で日ロフォーラムというものが開催されました。その時に、当時の衆議院議員だった鳩山由紀夫さんが、もう一度1956年の日ソ共同宣言の原点に立ち戻って考えることを提案すると述べまして、日ソ共同宣言から日ロ両国が共に歩みより、つまり、日ソ共同宣言では二島を返還すると言っているのだから、さらにそこから歩み寄ったらどうだかっていう話をされました。ですから、恐らく国後島とかどこかの所に、択捉島のどこかに国境線を引いてってというような形で解決を迎えたらどうかというような話をされました。

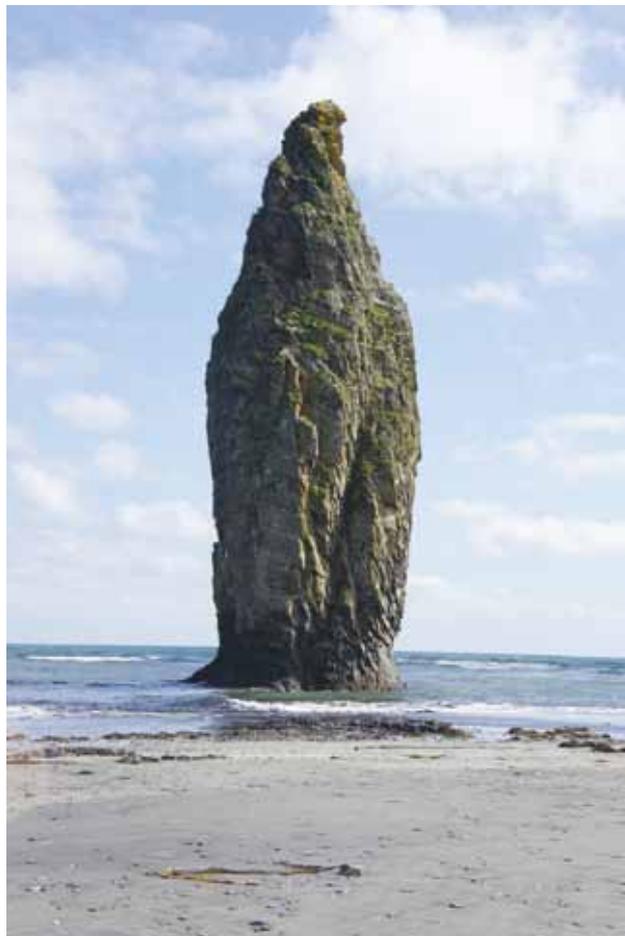
本当は元島民の立場としては、二島が戻ってくればいいのかそういう話ではなくて、四島全部が戻って来るという事が大前提だというふうに考えておりますが、ただ、こういう政治的な話になると、どちらかの意見が100%受け入れられるということは考えられないことになります。お互いに譲歩した中で

という、それが政治的な解決になるかなと個人的には思っておりますけれども。ただ元島民の考えとしては、やはり自分達をふるさとを戻して欲しいという願いがありますので、どうしても四島一括返還をして欲しいという要望をし続けて行かなければならないんだろ うと考えております。

この北方領土の問題というのは、やはり国際的にも歴史的にも四島の占領は侵略行為であると捉えておりますので、お互いに四島だとか二島だとか言っている、いつまで経っても解決の道はなあって来ないと私は考えます。ただ、もう本当に70年近く経って、元島民の方いつまで生きられるんだろうというのが本当のことですね。ですから、元島民の方が生きているうちに返って来ないとあまり意味がないのではないかなというふうに思っています。

戦争っていうのは本当に辛いものです。例えば、広島、長崎に落とされた原爆で、今も苦しんでいる方もいらっしゃいます。米軍基地で苦しんでいる沖縄の人達もいらっしゃいます。北方領土のように故郷を奪われて、今もなお戻れない人達。戦争という国家間の暴力行為が未だに国民に痛みを残し続けているという事が言えるのではないかなと思います。

このようなことが二度と起こらないように、私たちは後世にこれを伝えていかなければならないと考えております。もしこれから皆さんが、戦争や原爆について、お子さんやお孫さんなどにお話をする時に、この北方領土の問題も併せて伝えていただければ、今日私が皆さんの前でお話をさせて頂いた意味があるのではないかなと感じております。本当に短い時間ですけれども最後までご清聴いただきまして本当にありがとうございました。





---

平成26年度  
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて  
第25回「元島民の北方領土を語る会」集録

---

発行／平成27年3月

編集／~~鶴~~ 北方領土復帰期成同盟

〒060-0001

札幌市中央区北1条西3丁目3番地

札幌プラザビル3F

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

e-mail：[hoppou-d@isis.ocn.ne.jp](mailto:hoppou-d@isis.ocn.ne.jp)

印刷／株式会社 正文舎

---